

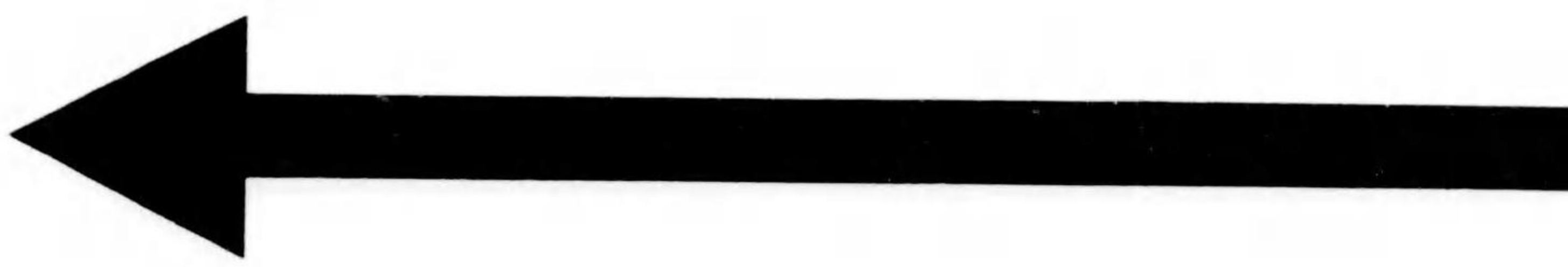
書叢ヲカフ  
要史築建本日  
述助之松居龍

特100  
321

~~374  
869~~



始



特100  
321.

編九十第書叢ギカア



文學士

龍居松之助述

# 日本建築史要

大正  
3. 6. 1  
内交

### アカギ叢書發刊の辭

予往年將に中學を終へて、生涯を捧ぐべき職務を選定する必要に迫らるゝや、懊惱之を久うして遂に書籍出版業を得たり。即稍狂熱を有したる文筆の樂を棄て、直に一書肆の丁稚となつて初めて轅を握るや、爾來葱忙の間に既に六星霜を経たり。未だ何等の得る所無きを耻づと雖、當今所謂書籍界の狀勢を見、立志以來の『書籍によりて享受し得べきあらゆる幸福は、必ず之を一般に普及せしめ度し』との信念に至りては、年を経て益々固きを覺ゆ。是予が非才自ら顧みず大正三年元旦を期し、書籍出版業として微を此處に致すべく立ちたる所以也。

當今書籍出版業たる予の最も痛恨に堪えざるものあり。古今東西の科學、藝文にして、誠に珍重すべき内容を有し乍ら、吾國に於る普及の程度眞に微少を極めたるもの之なりとす。原因とすべきもの多々ありと雖、書籍の價高きに過

ぐる一也。内容難澁を極めたる一也。尨大なるが爲に繁忙の今日、止むを得ず  
閑却せざるを得ざるもの一也。先づ第一着手として今日アカギ叢書を刊行する  
に至りたるは、誠に此處に見る所あれば也。即アカギ叢書は各冊を全部金十錢に  
て提供す。外國語、古代語は、全部通俗にして度に適せる現代語に翻譯す。如  
何に尨大なる内容をも、妙味を失はざる限り、必ず袖珍百頁にコンデンスす。  
依つて以て從來専門家、篤學者のみの專賣に委したる宇宙の眞理、學術の寶庫  
の、高價、尨大、難澁の三大門戸を開放して、あらゆる人士の活用に供せんと  
す。未だ善美を盡さずと雖、予が事業の第一聲としては私に誇りとする所也。  
希くは大方の諸賢、幸ひに善導を賜へ。

( 2 )

大正三年三月

赤城正藏白

小 引

建築の沿革は文明史藝術史を説く上に於て忘る可らざる重要なことである。  
従て遺物を保存して行くことは大切なことで、外國に於ては近年に至つてその  
研究が非常に進んでゐる。而して我國に於ても去る明治三十年はじめて古社寺  
保存法を發布せられて後、古社寺の中より特別保護建造物を指定して、之を永  
遠に保護して行くこととなつたのである。併し未だ一般の人がかく貴重なる遺  
物に對しても、一向興味を起さないのは遺憾である。

( 1 )

其所で私はかゝる建造物に對して一般の人々に興味を有たしめるには、どう  
しても之等に對する智識を有たしめなくてはならぬと思ふ。それがこの小著の  
目的なのである。若し夫れ稍詳細のことに至つては友人山田工學士と共に目下  
材料蒐集中であるから、近き將來に於て公けにする機會があらうと思ふ。

日本建築の沿革に就ては既に東京帝國大學工科大学の塚本、伊東、關野三工

學博士が多年専門學者として研究せられてゐるが、私のこの小冊子も畢竟これ等諸先生の説を綜合し、之を國史の記録と併せ考へて述べたのに過ぎぬ。

遺物の説明は頁數の都合で代表的のものに止めたが、これ等の外にまだ若干あることは云ふまでもない。而して本文中の紀元何年とあるは神武天皇御即位紀元である。又本文中の術語の解釋に不明の所があつたらば工學博士中村達太郎氏著「日本建築字彙」を参照されたいと思ふ。

終に或は多くの注意と助力とを與へられ、或は寫眞蒐集に盡力せるれたる子爵愛宕通經、工學士山田醇、工學士吉田享二の諸氏に對し謹んで謝意を表す。

大正三年五月

下戸塚の枯山草廬にて

著 者 識

### 日本建築史要目次

目 次

序 説……………一

第一章 佛教渡來以前の建築……………七

第二章 飛鳥時代の建築……………二〇

第三章 寧樂時代の建築……………三三

    第一 白鳳期……………三三

    第二 天平期……………四一

第四章 平安時代の建築……………四八

    第一 弘仁期……………四八

    第二 藤原期……………五六

第五章 鎌倉時代の建築……………六四

序 説

日本建築の沿革を述べやうと思はゞまづその系統より考へねばならぬと思ふ。

抑々東洋建築には三大系統がある。曰く回教系、曰く印度系、曰く支那系、而して日本の建築はこの三大系統の中支那系の一分派に屬する木造櫺式の建築であると云はれてゐるが、伊東工學博士の説によると、反てその發生の状態は南洋諸島に見る小屋と甚だよく似てゐるといはれてゐる。

兎にも角にも日本の建築は支那系の一分派ではあるが、一種特別の調子を有

第六章 室町時代の建築……………七五

第七章 桃山時代の建築……………八〇

第八章 江戸時代の建築……………八七

第九章 明治時代の建築……………九五

挿入寫真版

伊勢内宮、法隆寺金堂、藥師寺東塔、唐招提寺金堂、室生寺五重塔、鳳凰堂、蓮華王院本堂、觀心寺本堂、同一部、東大寺南大門、圓覺寺舍利殿、金閣、大徳寺唐門、本願寺飛雲閣、日光東照宮陽明門

日本建築史要

文學士 龍居松之助述

つてあるものであることは争はれぬ事實である。

なほ同博士の説によればこの小屋こや（天地根元宮造てんちこんみやづくりと謂ふ所のものを指す、第一章「佛教渡來以前の建築」の條参照）は毫も防寒の用意なく、而も全然植物の材料のみを以て造られてゐる點から考へても、その起源は植物の豊富な南洋の諸島に起源を見出すであらうと推測せらるるといふ。而してこの形式は獨り南洋の諸島のみでなく、亞細亞大陸の内にも今日實例を見ることがあると云はれてゐる。

( 2 )

然るにこの原始的な建築方法は日本民族が此の國に移住してからだん／＼と進化して、それ／＼自然の條件と適應するやうになり、その間には日本民族の先天的趣味も加はつて、漸次發達して來たものであらうと想像されてゐる。

さて自然の條件とは何か、云ふまでもなく地勢の關係、氣候の關係、建築材料の關係、の三つが大なる條件となり之等に人爲的の變化が加はつて漸次進化

して來たものに外ならぬ。以下、各條件について略述しておかうと思ふ。

### (一) 日本の地勢

日本の地勢は管々しく述べるまでもなく、山紫水明の境は到る所にあると云はるゝほどあつて山や水には富んでゐるがその山も水も大規模なものはなく、全國概ね婉麗なる小丘の連続と見てもよい。それ故何所を見ても壯大とか雄偉とかいふ感じはない、而もこのやうな山水に富んだ土地であるからして大なる平野もない。云はば日本畫に見るやうな瀟洒たる風景の國である。

( 3 )

かゝる自然の地勢は國民性の上に大なる影響を及ぼすもので、穏やかな國民性を生じたのである。従つて大陸的の國民性とは大なる相違があり、趣味嗜好なども雄大なるものにあらずして、繊麗微細なる箱庭的技巧を喜ぶやうな傾向を帯びて來るのは當然と云はねばならぬ。彼の室町時代の遺物金閣の如きは其

の代表的のものであらう。

以上の國民性はわが建築の上に於ても遺憾なく現はれてゐるので、地勢がその土地の建築の上に大なる關係を有つてゐることは争はれぬことである。

### (二) 日本の氣候

日本の土地は南北に長く亘つてゐるからして、その北端と南端とに於ては餘程氣候に差があるが、その標準ともなる土地、即ち人間の住んでゐる大部分の、云はゞ文明の中心となるべき土地は概して溫帶に屬してゐるので、春と秋との二季の如きは實に世界稀に見る好氣候である。而して海に寒流と暖流と兩流が相交錯する所には水蒸氣が常に多い、且つ四季を通じて空氣に濕氣を含んでゐるやうである。

それ故、寒氣を防ぐべき嚴重なる壁の設備も不必要である、加之濕氣を除く

( 4 )

が爲めにはどうしても開放的の建築とせねばならぬ。と同時に檜材の如きは濕氣によく堪へるのである。

かゝる氣候の關係からどうしても建築物が低く、且つ地震が多いので大建築が出来なかつたのは實に止むを得ない。

### (三) 日本建築の材料

日本の地勢と氣候とは上述の如くであるが、山林も實に豊富で、檜、松、杉、椴等は實に無盡藏の觀があつた。

それ故我國の古は、これ等の木材を以て唯一の建築材料としてゐたのである。而して石材なども火山岩などがあるのではあるが、建築に用ゐらるべき良石材に乏しいので之は用ゐられなかつたやうだ。

これは必ずしも石材の使用を知らなかつたのでもなからうが、古は慣習とし

( 5 )



て吉凶毎に住居を改築するやうなことがあり、かたゞ永久的の建築を必要としなかつたのである。であるから焼けたり朽ちたりすると直ちに樹木を伐つて新しく建築したのであつた。

この習慣は廳て木材楣式の建築の發達を促したけれども、日常生活の形式（主として坐ること）と相俟て建築物の外観が低矮なるものとなつたのである。然るに右の三條件に適應して出來た日本固有の建築は外國との交渉によつてだん／＼と趣味の上に變化を來し、漸く固有の日本趣味と外國趣味との調和を見るやうになり、かくして各時代を経て今日に至り外國建築の輸入と共に一進化せんとする機運に向つてゐるのである。

なほこの外に人爲的の變化としては政治、宗教、習慣等は云ふまでもなく、戦争等によりても大分影響を受けてゐることは明かなことである。

## 第一章 佛教渡來以前の建築

上代の事蹟は茫漠として荒唐無稽の説多く捕捉に苦む所のものは世界各國の歴史が皆然らざるなく、獨り我國のみではないのである。

けれども順序としてまづこの時代の建築の大要を述べておかねばならぬと思ふ。たゞ史料貧しくして多く推測であることは止むを得ぬことと思はれたのである。

大和民族東征前出雲民族が中國地方に勢力を有してゐたことは疑ひもないことであるから、従つて當時の家屋制の如きも特有のものがあつたに違ひない、而して今日の出雲大社の形式が或は彼等出雲民族の住宅より進化したものであるまいかと思はれる。

その頃の家屋制が果して出雲大社の形式を有つてゐたかどうかは別として、

何れにせよ甚だ幼稚な構造であつたといふことは想像するに難くはあるまい。所が天孫降臨し給ひて出雲民族を壓倒するに及び所謂大和民族が新たに勢力を把持し、天下に號令するに至るや、家屋制の如きも、自然之等の新しき民族の有する固有の習慣や智識によつて定められ、自然先住民族のそれと違つて来たことは必然のことであらうと思ふ。

もしも果してこの新たなる大和民族が先住者たる出雲民族と異つたる家屋の構造形式を有つてゐたとすれば、それは或は今日の神明造しんめいづくりの根元ともなるべき長方形平人\*ひらいらのものではなかつたらうか。之はたゞ推測に過ぎぬけれども大社\*おほやしろの形式が妻入\*つまいりであるのに對して、出入口の位置の違つてゐるといふことは、何等かの意味があるのではあるまいかと想像することも或は出来るであらう。

また我國の傳説によると我國と韓半島との交渉は遠く神代に於て素盞鳴尊が新羅國曾戶茂梨そしもりの地に航し給ひしと傳へてゐる。また天あめの日槍ひやりが新羅から來朝

して歸化したことも傳へてゐる。のみならず神武天皇の皇兄稻水命が新羅に渡つて王となり給うたといふ傳説もある。之等の云ひ傳へから考へると我國と韓半島との關係は餘程古くからあるらしい。

既に神代に於てさうであつたが、その後神功皇后の三韓征伐以來愈々交渉が頻繁になつて、彼の地の文物が輸入されたものが甚だ少くなく、わが建築術の上にも影響した所が多かつたらうと思ふ。今日ではその實例の發見せられたものが甚だ少いのは遺憾至極なことであるが、家屋の裝飾に關しては皇后の征韓後、五彩の獻上があつたことや、彼の仁德天皇が人民の貧窮を恤はれんために、三年間の租税を廢し、同時に宮殿の裝飾を止め給ひしといふことでも、既にその頃の建築に多少の裝飾が施されてあつたといふことは想像されるが、まだまだ建築上に於ては直線式の極めて原始的なものであつたと信ぜられてゐる。要するにこの時代の建築はまだ幼稚なものであつたと云はねばならぬ。

(イ) 住宅

この時代の建築は前述の如く幼稚であつたが、さて住宅は如何なるものであつたらうか。まづ大別して穴居と家居との二つに分たねばならぬ。

穴居 これは穴に住むといふ文字通りの住居で、イハヤ(石窟)とムロ(土窟)との二つの種類がある。

構造は極めて簡單で、風雨を防ぐを以て足れりとしてゐる、それゆゑ門戸の高さ四五尺、戸は磐石を以て之に充て、窟の内部から閉めるやうにしてある。

室内は大概一二間四方の狭いものである。これに住居する者は所謂土蜘蛛の類の蠻民であつたといふ。

家居 この方は穴居とは異つて家屋を造つて住むのである。まづ平地に二本の柱を立て、それに棟木を渡し、次に兩側より丸太を之に斜めに相交せしめ

(即ち合掌)之を蔓繩の類で結び、その斜めに交叉した材の上へ小舞こまひの如きものを置き、その上に通常茅を以て葺いたといふことである。畢竟、小屋こやといふべきものである。而して防風の装置として棟の上に丸太を横たへた。之が後の葛か緒木むぎの起原である。また前に云つた棟の兩側面の兩端から相交するやうにかけた材の合掌が延長した部分が彼の千木ちぎなるものの本來の形である。後世の匠家が天地根元宮造といふのは即ちこんな風の小屋である。

その後漸くこの様式から發達して行つて、床を高くし階段を設くる等、稍進歩したやうであるが、なほ木材は黒木くろぎを用ゐ、まだ釘や鋸を知らなかつたから、各部の連結には葛繩を以てしたのであつた。要するに當時の住宅は永久的の意味は勿論なく、宏大なものよりは寧ろ當時の人間の固有性たる清潔なるものを欲したのであつた。この種の家屋のあつたことは古事記の記事などにも所々に見えてゐる。

この稍進んだ住宅は周圍に垣を備へてゐる、而してその用ゐられた材料によつて磯城、柴垣、黒木等の名がある。さうして出入口には今日の鳥居やうのものがあつて門としてゐる。

またこの頃の風習として吉凶ある毎に必ず新屋を造りたることは歴史上疑ふことが出来ぬ。それも清潔を好む民族であつたと同時に、材料が木材であつて、礎石を用ゐぬ堀立て造りであつたから家屋の生命も自然短かつたのであらう。

### (口) 神社

我國上代の宗教は、自然物崇拜と祖先崇拜とあつて、共に甚だ盛んであつた。まづ祭事を行ふには神聖なる土地を擇んで修祓し、四方に磯城、又は神籬、四目繩などを廻らし、この中で神事を取り行つたやうである。この頃には神社といふ建物は必しもあつた譯ではない。所が後には神寶を藏すべき目的で、神籬

の中に宮殿を建てるに至つたのである。今日の大和の大神神社の如きは山そのものが神體であつて、その前面に所謂三輪鳥居を建ててあるのみであるのは最もよく自然崇拜の形式を示してゐるものである。

かくはじめは祭神と神社建築とは直接の關係が無かつたが、漸次文明が進んで來ると共に今日見るやうな諸種の神社建築が出来たのである。

而して創始期に於てはそれ等の神社建築が住宅建築と様式を同じくしてゐたであらうといふことは推測に難くはあるまい。(出雲大社間取參照)

神社建築の様式としてこの時代に出來たものは大社造、大鳥造、住吉造、神明造の四様式がある。

今日の神社でそれ等の様式の實例は左の如きものである。勿論後世の手法を混じて、裝飾などもあるが、根本の様式は創始當時の古態を存してゐるのである。

大社造 出雲大社 (出雲國簸川郡杵築にあり)  
大鳥造 大鳥神社 (攝津國泉北郡鳳村にあり)  
住吉造 住吉神社 (攝津國東成郡住吉村にあり)  
神明造 伊勢大廟 (伊勢國内宮、外宮)

この四様式の中、前三者は共に妻入の平面圖を有するが故に前後に千木を有つてゐるが、神明造はさうでない、平入なるが故に左右に千木を有つてゐる、之は今日の實例で見れば一目瞭然であらう。而して前三者は正方形又け前後に長き平面圖を有し、後者は左右に長き平面圖を有つてゐる。創建の時の建築は輪廓が直線で、堀立茅葺であつたことは何れも同じである。(今日のものは後世の改造毎に改造時代の手法を混じてゐるから、創建當時のものよりも進歩したものとなつてゐる。ただ大體の形式に於ては、今日のものとなほ當時の倣を存してゐるといふのである。)この外墳墓についても説かねばならぬが概説であ

るから省略することとする。

實 例

出雲大社本殿 (出雲國杵築町所在)

今日の大社本殿は寛文七年(紀元二二二七)に正殿式に復して後延享元年(紀元二四〇四)その時の規模によつて再建したものであるから、江戸時代の建造物ではあるが、その平面は古代の儘であると思はれる。従て我國の神社建築中最も古制を保つてゐると云はれてゐるのである。

殿は二間四方で、廻椽がある。屋は左右に葺き下し、上に千木、葛緒木を上げてある。

入口は正面の左方に片寄つてあり、その前に階段がある。而して内部は中心に心の太柱あり、それから左方、即ち階段を上つて突き當りに壁があつて、そ

の後方に神座がある。

かゝる形式は餘程面白いので、これが古代の住宅の形式であらうと想像せらるゝ所以である。

元來神社の建築は森嚴でなくてはならぬのに、かゝる平面は餘程森嚴といふことに缺けてゐる。これが古代住宅の間仕切りを窺ふに絶好の資料とさへ唱へる學者があるのも尤もなことと云はねばなるまい。

\*エレヴェーション

又立面に於てみるに正面に破風あり、棟には千木、葛緒木あり、廻椽には勾欄を附けてある。而して何れも後世の手法を混じ、破風に反を有つて居り、千木が置千木となつてゐるなどは創建當時のものに比して違つてゐることと思はれる。これは改造する毎に改造時代の手法を混ざるのは強ちこの出雲大社の本殿ばかりではなく、すべての建築物に於て見る所で、それが木造建築である以上猶更のことである。

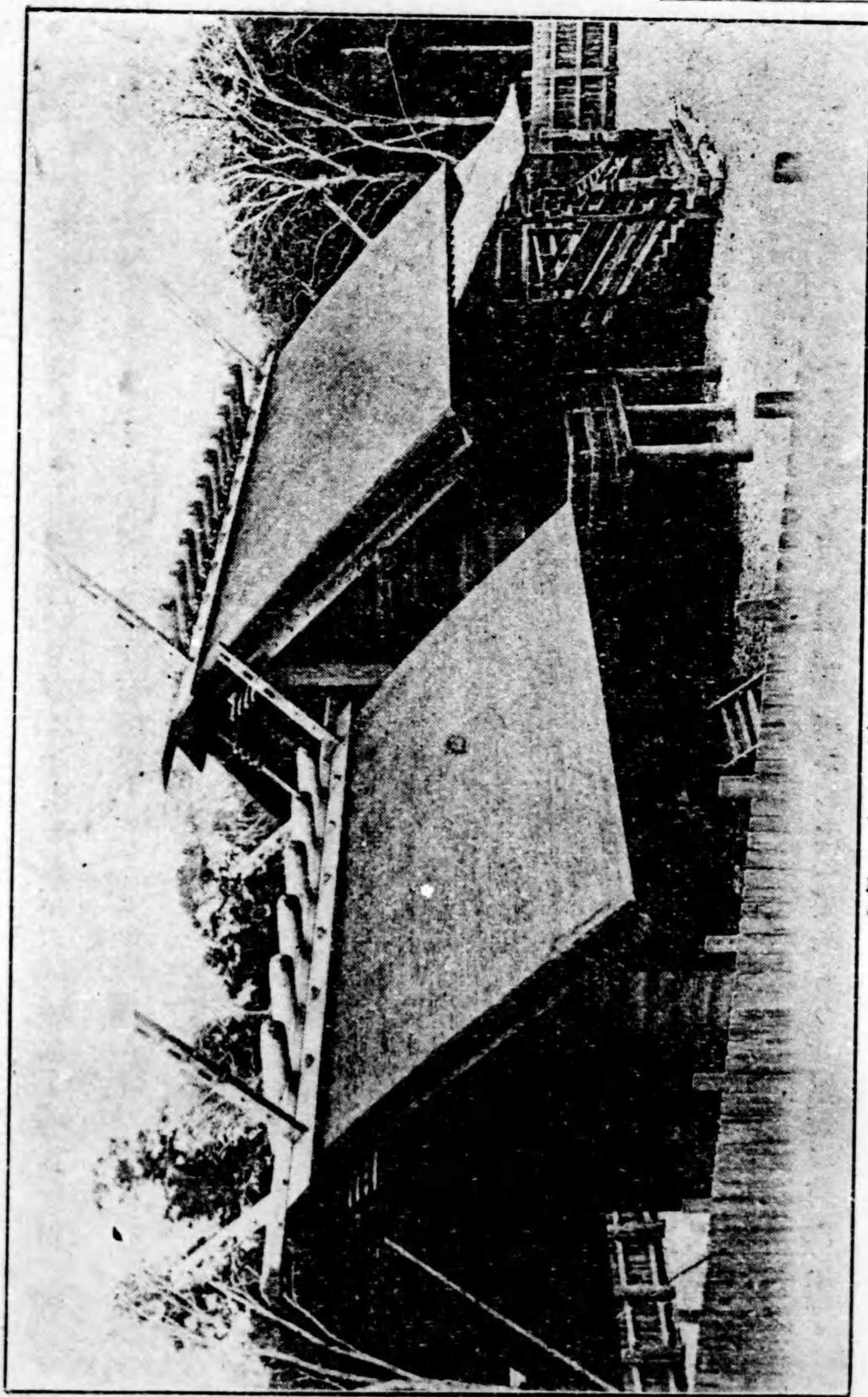
この形式に屬するものは山陰山陽地方に澤山あるが、同縣八東郡大庭村の神魂神社本殿の如きは唯その間取りが左右轉換してゐるのみである。

### 伊勢大廟(内宮)

出雲大社の本殿が出雲民族の住宅形式を存してゐると云ふ人は、伊勢大廟の建築形式なる神明造を以て大和民族の住宅形式を存してゐるといふ。

さてこの神明造の代表的のものには伊勢大廟の建築がある。即ち平面は三間<sup>げん</sup>二面<sup>めん</sup>であつて、横に長く中央に神座があり、正面中央に一間の階段を設け、扉を附けてある。周圍は總て板圍ひで、その外に廻椽があり、それに勾欄が附けてある。而して左右の切妻には棟持なる太き圓柱があつて棟の重量を支へてゐる。

この圓柱から考へてみても古は廻椽は無かつたのであらう。屋蓋は前後に葺



伊勢大廟(宮)

き下し、千木、葛緒木等は出雲大社と同様にあるが、この建物も今日け單に裝飾の如くなつてゐる部分に於ても古代の遺風を認めることが出来る。

この形式は出雲大社と先づ屋蓋の懸げやうに違つた點があり、従つて入口の位置が違ふ。而して出雲大社の如く屋蓋が入口の前に立つて見た時、左右に葺き下されたものを妻入つまいりと云ひ、伊勢大廟の如く前後に葺き下されたものを平入ひらいりといふのである。

【備考】

何間なにげんとは間口の柱間を云ふ。  
何面なんめんとは奥行の柱間をいふ。

故に三間二面の平面を有する建物とは間口の柱間が三つあり、奥行の柱間が二つあるものを指して云ふので、方三間とは間口奥間共に柱間三つのものをいふのである。因にこの何間といふ間けんの單位は六尺ではなく、

一定してゐるものではない、たゞ柱間の数が幾つある、即ち柱が何本あるといふことを示すのに止まるのである。

平面圖 (Plan) 建物の眞上より見た平面圖のことである。

立面圖 (Elevation) 建物の前に立ちて之に向ひて見たる立面圖のことである。

妻入 正面に向つて立つた時、屋蓋が左右に葺き下されてあるもの。

平入 正面に向つて立つた時、屋蓋が前後に葺き下されてあるもの。

## 第二章 飛鳥時代の建築

我國に佛教の入つたのは繼體天皇の十六年(紀元一八二)に支那南梁の人司馬達等が大和坂田原に堂を建て、佛像を安置して之を禮拜したといふことが歴史に見えてはゐるが、まだ一般の信仰は得なかつたやうである。然るに欽明

天皇の十三年(紀元二二二)百濟の聖明王がその臣を來朝せしめて佛像、幡蓋、經論等を獻上せしめた。これが公式に佛教が我國に入つた時である。

その時に新取派と守舊派との軋轢があつて、終に守舊派の勝利に歸し、佛教は朝廷から排けられたが、佛像經典等は蘇我稻目に賜つたので、彼は之を小墾田の第に安置し、向原の別業を淨捨して寺に充てた。之が我國寺院の嚆矢であつて彼の向原寺といふものである。

その後惡疫等のことがあつて佛教の盛衰があつたが、それは別問題である故こゝには述べぬ。所が推古天皇の御代に至つて天皇が厚く佛教に歸依し給ひ、厩戸皇子、大臣蘇我馬子等の佛教擁護者が政治上に勢力があつたので、從て佛教も茲に興隆の基本を確立するやうになつてからは恰も江河の決するやうな勢で佛教は當時の社會に一大勢力を有つやうになつた。

その後直接支那大陸と交渉するやうになつてからは益々藝術上大陸の感化を



受けたことが多かつた。

それ故恰度かゝる時代に興つた我が國の佛寺建築が大陸的文明の影響を受けて一躍複雑なるものを現出するに至つて、漸く固有の直線的のものから一步を進めたのは注目すべきである。

かく佛教傳來してから僅々五十年ばかりの間に我國の建築が驚くべき進歩をなし、所謂推古式なるものを形成するに至つたのである。さうして推古式とは如何なるものかといふに、純然たる三韓傳來の建築様式であつて、それには大陸に於て東西文明接觸の結果として、遠く西方の藝術が中間種族の媒介によつて輸入されたとも思はるる紋様なども見ることが出来る。

抑々この飛鳥時代の建築様式は三韓から入つて來たものであるとは云へ、その三韓の様式は何處より來たかといふに、それは支那の六朝から來てゐると云はれてゐる。けれどもその六朝の様式をその儘日本に傳へたものとはどうしても

信じられぬ。即ち三韓に輸入されて幾分三韓趣味が加へられたものが、今や更に我國に輸入されて日本趣味を加へたことは事實であるらしい。

要するにこの時代に於て佛寺建築が百濟の工匠の手に依つて經營せられた以上必然の結果として百濟式伽藍が出來たことは少しも不思議ではあるまい。

かくして我國の建築は幼稚な創始的のものから一躍して大陸風の複雑巧妙なるものとなつたので、この時代は日本建築史の上に決して忘れることの出來ぬ大切な時代である。

### (イ) 宮殿及住宅

かく大陸的のものが輸入せられたに拘はらず宮殿は甚だ幼稚なもので、前代の繼續といつても差支へがないほどであるが、記録に板葺、瓦葺の宮殿が出來たとあるから、材料などの點に於てだん／＼進歩して來たのであらう。けれど

この板葺とは今日のやうなものではなく、大きな板を重ねて葺いたのであらうと云はれてゐる。

裝飾も極めて僅小であつたに違ひなく、まだく創始的臭味を脱しなかつたが、兎に角全體に亘つて様式などもだんくと進んで来たことは疑ひない。

### (口) 佛 寺

この時代で最も注意すべきは佛寺建築であること云ふまでもあるまい。さてこの時代に出来た百濟式伽藍とはどんなものであつたかといふに、所謂學問寺であつて、平地に南面して建てられ、東西南北に門を開き、其の内に東西の兩塔を建て、廻廊を以て方形の一廓を造り、その正面に中門がある。而してその中に金堂こんだうを建て、講堂は更にその後方にある。その外鼓樓、鐘樓、經藏、三面臨房、食堂、浴室等が備はつてゐる。

金堂は通常壇上に立つて二層である。床には登を敷き、塔は時に九重又は十三重のものもあるが、概して三層か五層である。また中門、南大門は多く重層で、その何れかに金剛力士を安置してゐる。食堂と浴室とは適宜の所におくが、すべての配置が整然と左右均整を保つてゐる。

今日この時代の形式を傳へてゐるものは大和國法隆寺の中門、金堂、廻廊の一部五重塔等で何れも當時の建造物である。

また彼の玉蟲の厨子もこの時代の様式を窺ふには好模型である。

これ等の遺物で見ると、當時の建造物の特徴とも云ふべきものは軒が一軒で、礎石の表面が地面と同じ水平にあること、床に登を敷けること、柱にふくらみを有つてゐること、その外組物などにもこの時代特有のものがある。それは組物が簡單であること、皿斗まひらこ、雲肘木くもひぢま、雄健なる曲線カーブ、アツシリアより入り來れる忍冬紋ホトトギス様が各部に應用せられてゐること等で、さうして極めて思ひ切つた手

法の認めらるゝのは今日の法隆寺の遺物などを見れば分るであらう。  
 兎に角、この時代の建築は寺院建築によつて代表せられ、而も支那の六朝式が百濟の工匠によつて多少本來の六朝式のものと同様の所へ、更に多少の日本式を加へたものであつた。

(ハ) 神社

神社も住宅と同様にこの時代に於ては前代のものであつて、まだ容易に大陸の感化を受けた跡が認められぬ。それゆゑ先づ大體に於て前代のもと同じであるとして差支ない。

遺物

法隆寺金堂 (大和國生駒郡法隆寺村所在)

法隆寺の出來たのは推古天皇の御代である。今同寺金堂の大體について述べてみやう。

平面は五間四面で、※桁行ゆき桁行四十五尺九寸、※はりま梁間三十五尺三寸、内部は真中の三間四面を内陣とし、外を廂としてゐる。而して屋は重層の入母屋造で、瓦を以て葺き、全體が高い石壇の上に立つてゐる。又内陣は稍立き土壇を造つてその上に釋迦(中央)藥師(東)彌陀(西)の三像を安置してある。

内陣の天井は折上組入天井で、廂はたゞの組入天井である。而して裝飾は内外概ね丹土を塗るに止められたれど、勾欄れんげの檼れんげ子などには綠青が塗つてある、天井格間や支輪等は寶相花を描いてある。四壁の壁畫は有名なるものであるがこれは白鳳時代の作だらうと云はれてゐる。今日ある堂の四面に設けらるゝ裳階も矢張り白鳳時代のものだらうといふ。

この建物について注意すべきことは軒※ひとのまは一軒ひとへたるま(一重垂木)であるが深くして

心地よく反つてゐる。而して重層の上層は割合に小さいから安定が甚だよろしいのである。

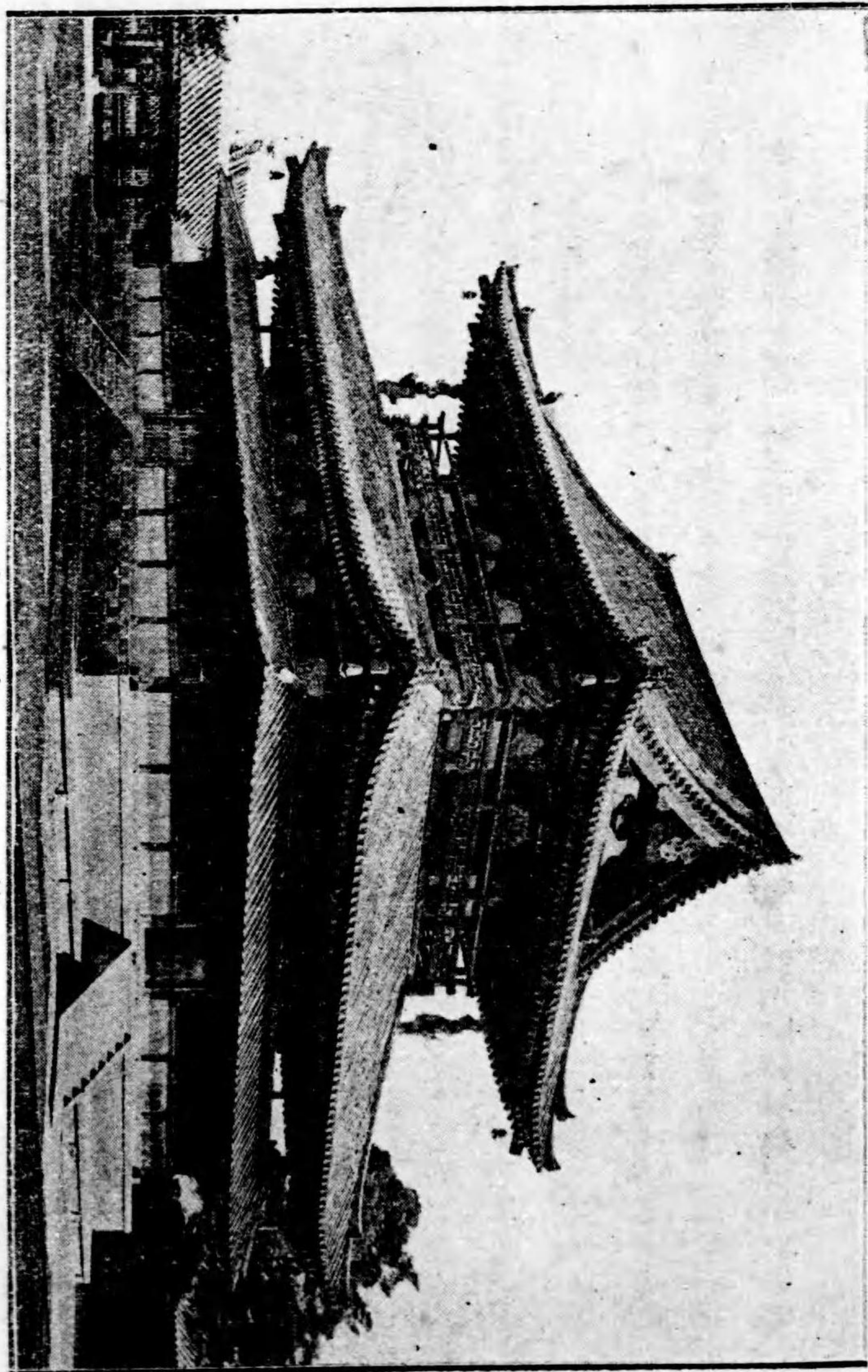
又柱は膨みがあつて太く、下部より上部に至るに従て膨みを減じてゐるから一見堅牢らしく見える。

組物は雲肘木雲斗（ひぢきと）と云はれてゐるもので、これ亦強き曲線の妙味を示し、而も丈夫さうに見えてゐる。又勾欄の櫺子には卍字崩しとも云ひ得る一種特別のもので純支那趣味の巧妙なる手法が他の剛健なるものと相對して實に面白いのである。

之を要するにこの建物は少しも虚飾の無い莊嚴なるもので、すべての點に於て秀でたるものであらう。又同寺の中門、五重塔、廻廊の一部も同時代のもので、金堂と同様優秀なものである。

また法隆寺と同じ時代の建物の模型とも見るべきものに彼の玉蟲厨子がある。

法隆寺金堂



これは美術品として人のよく知つてゐる所のものであるが、當時の建築模型としても實に得難いもので雲肘木、屋蓋等何れの點にも當時の建築の倣を残してゐるのは珍とせざるを得ない。法輪寺、法起寺の三重塔もこの時代の遺物である。

序だから茲に鳥渡云つておきたいのは法隆寺再建説と非再建説とがある一事である。再建説は日本書紀の天智天皇九年の記事を根據としてゐるのであるが、之に對して工學博士關野貞氏は實地調査の上、尺度が高麗尺であることを知り且つ様式の上などから非再建説を唱へてゐる。然るに文學博士喜田貞吉氏はこの説を駁してゐる。何れにしても國史に創立の年月記載なきを以て不明であるが、要するに藝術家は様式の上より非再建説を唱へ、史學家は記録によつて再建説に賛成してゐるやうである。これは何れも一理のあることであらう。なほ「建築雜誌」第二百十八號、「史學雜誌」第十六編第二號及び「歴史地理」第七編第

四號より第八編第一號まで、に掲げられたる論文を讀まばこの兩説が詳細に分るであらう。こゝには唯かゝる兩説があるといふことを述べておくに止める。

【備考】

桁行 けたゆき 小屋梁に直角なる方向、即ち間口のことと思つて差支ない。

梁間 はりま 梁行きのことにて小屋梁の長さ、即ち奥行のことと思つて差支ない。

一軒 ひとのき 垂木が一重の軒をいふ。

二軒 ふたのき 垂木が二重の軒で下のものを地垂木、上のものを飛檐垂木といふ。

組物 くみもの 軒飾りの一種で、斗、肘木、の組合せである。

第三章 寧樂時代の建築

普通政治史の上では孝徳天皇の大化元年（紀元一三〇五）から桓武天皇の延暦十三年（紀元一四五四）平安遷都に至る百五十年ばかりの間を云ふが、藝術

史の上からは之を更に二期に分つ必要がある。それは即ち白鳳期と天平期とである。故にこゝにもこの兩期に分けて説くこととする。

### 第一 白鳳期

これは律令制定の時代から天平期に至るまでの間を便宜上から稱するのである。

さて前代に發達した藝術はその後この期に入つて政治上の變遷と外交上の關係から一轉化を來した。

蘇我氏の滅亡によつて族制政治は跡を潜め、革新の序幕はこゝに開かれたのである。それより大化の改新となりて舊制を改め、初めて唐の制度に倣つて、中央集權の實が擧つた。

此の如くして終に文武天皇の御代太寶元年(紀元一三六一)に至つて律令が完

成したのであるが、試みに太寶令を見ると中務省の管する所に、畫工がありて正、佐、令史、畫師、畫部、使部、直丁、等の職員が定められてゐる、さうして之は當時繪畫が多方面に應用せられたことを證してゐるのではなからうか。これはホンの一例に過ぎぬが、兎に角日本藝術史の上に於ては實に注目すべきことであつて、建築も之がために變化を生じたことは極めて多かつたやうである。これもとより大陸と直接の交渉が益々繁くなつて、陥亡び唐の世となりても決してこの方針を變へず、益々大陸の文化輸入に汲々たるものがあつたからである。而もこの時が恰も支那では唐の初世であつて、藝術の益々興隆せんとする時であつたことは實に偶然な幸福であつたのである。

けれど白鳳期の藝術に影響した大陸の文化は唐ではなくて寧ろ隋であつた。唐の文化を輸入したのは實に次ぎの天平期である。

當時唐は隋の後を承けて建國したとは云へ日猶ほ淺く、その文明は實に隋の

餘影を存してゐたのに止つてゐるのであるから、我國に當時輸入された大陸の文明が隋のものであつたといふことは當然のことである。

それ故白鳳期の建築はかゝる時に、前代のものを繼續し、推古式の古拙より稍精巧を加へ來つたのであると同時に三韓を経ずして直接に支那より輸入された様式手法を有してゐることが前期とは違つてゐる而して飛鳥時代より天平期に移らんとする過渡時代であつて、總て成熟せざる點があつたやうである。

### (イ) 宮殿及住宅

宮殿建築は大陸の感化を受けて餘程進化した、今日それが如何なる程度まで唐風に進んでゐたかといふことは斷言し難い所であるが、兎も角も平城京の出來た時に八省院が主なる建物であつたことは忘る可らざること、その中の朝集殿は後に唐招提寺に賜つて講堂としたのである。今日の講堂は即ちそれで、

寺に移した時に多少の模様を變へ、且つ建治元年(紀元一九三五)に大修理を施したので鎌倉式が多く加へられてはゐるが、全體の形はなほ朝集殿の倣を存してゐる。これはホンの一例に過ぎぬが當時の宮室建築は餘程進んで來たことは毫も疑ひのないことと思はれる。

### (ロ) 佛 寺

この時代の伽藍制度は奈良六宗を通じて同一形式ではあるが、その手法に於ておのづか自ら差違がある。

尤もこの期に於て奈良六宗の全部が出來たのでなく、次ぎの天平期に至つて完成したのではあるが、兎に角建築の上から見て前期と異つてゐるから大略述べておく必要があるであらう。

この期の遺物としては僅かに大和國生駒郡都跡村にある藥師寺の東塔のみで、

甚だ乏しいけれども、これを推古式のものに比べると大分違つた點がある。

まづ配置からいふと百濟式から唐式に一變してゐる。唐式とは中門内には堂宇なく。東西の兩塔は中門外に左右に建てられ、金堂は廻廊の北面する部分にあつて前代の伽藍の配置とは餘程違つてゐる。これが主なる點であらう。

それから此の期のものには主に軒が二軒となつてゐて、地垂木は楕圓の斷面を有つてゐる。その外手法に於ても前代のものよりは進化してゐる。

遺物としては上述の如く藥師寺の三重塔があるのみであるが、奈良海龍王寺の西金堂内にある五重塔の模型も様式などの上から一つの遺物であらうと云はれてゐる。

### (ハ) 神社

この期に於ける神社は形式に於て前期と異なる所がないが、盛んに經營された

ことは忘れてはなるまい。けれどもまだ前期の形式を固く守つてゐたのであるから、曲線形は用ゐられず直線式のものであつた。

### 遺物

#### 藥師寺東塔 (大和國生駒郡都跡村所在)

藥師寺は持統天皇の御代に伽藍を同國高市郡白樫村に經營せられ、文武天皇の二年(紀元一三五八)に略成りたるを、養老二年(紀元一三七八)之を平城京に移し建てられたので、この三重塔もその時のものであつて、當時は東西兩塔を金堂の前に建てられたのであつたが、今はその東塔だけしか残つてゐない。

この塔の舍人親王の擦銘せうめいは有名なものであるが、その銘によると文武天皇即位八年に建てられたとあるから、恐らくはじめ白樫村に建てられたものが、移されたのであらうと思ふ。



この塔は（方二十六尺一寸、裳階方三十八尺三寸、高百十一尺八寸六分）石境の上に立つてゐる三重の塔であるが各層に裳階があるから一見六層の如くに見える。而してその屋蓋が大小六層交互してゐるのは實に奇觀を呈してゐる。且つ軒の出が多く、屋蓋の勾配が緩であることは頗る美的で心地よい感を與へてゐる。而して各層大小の比例が割合に大であることはこの塔の權衡を保つ上に大なる効果がある。

柱は法隆寺ほどではないが極少しの膨みがある。組物は三手先、軒は二軒で、垂木は丸垂木が用ゐられてゐる。（法隆寺は角垂木）、勾欄は法隆寺のものと次ぎの時代のものとの中間に位するもので、裝飾はない。（後世の所謂菊斗が出来かかつてゐるのを見る）

九輪は露盤の上に受華がなく、水煙は天人の透彫があつて、擦に舍人親王の銘のあることは前に云つた通りである。



藥師寺東塔

内部は石敷、天井は折上組入で彩色が施してある。この時代のものとしてはこの三重塔があるのみである。(尤も奈良海龍王寺の西金堂内にある五重塔の模様が甚だこの時代の特徴を表はしてゐるので、一つの遺物として取扱はれてゐる。これには裳階がない)

【備考】

- 二手先組物 支輪の下端の下方にある斗組が二重のもの。
- 三手先組物 支輪の下端の下方にある斗組が三重のもの。
- 九輪 塔の最上層の屋蓋頂上にある銅製の部分。
- 露盤 塔の屋蓋の頂上にありて九輪を受けてゐる部分。
- 受華 露盤覆鉢の上にあつて九輪を受ける華形の部分。
- 水煙 九輪の上部の装飾、もと火炎の有様を作つたのであるが、建築物に火は忌む所から慈と反對に水煙と稱したのだといふ。

擦 九輪の心棒となるべき部分

第二 天平期

白鳳期の文化は聖武天皇の御代に至つてその極點に到達し、律令は勵行せられて所謂中央集權の實は漸く舉つた、其所で、この時より桓武天皇の平安遷都に至るまでの間を天平期と云ふのである。

此の時代の外國關係は前期の繼續であつて唐との交通愈々繁く、恰も唐は玄宗皇帝の時であつたから、支那文明史の上で文物開化の極に達してゐた時代であつた。それ故この支那の文明を直輸入した我國の文明も盛觀を呈したるは蓋し當然のことと云はねばなるまい。

であるから當時の唐の文明を説くべきが順序であらうが、それは省略することとする。さて當時の我國の佛教界を顧みるに、僧玄昉は入唐して法相を研め

經論五千餘卷と佛像とを將來し、唐僧道璿は華嚴宗を輸入し、鑑眞は戒律を傳へ、行基また神佛同體説をなし盛んに橋梁を架し道路を修め所々に精舎を建て巧みに人心を誘ひし功は甚大といふべしである。加之歴代の天皇佛教を深く信仰し給ひ、殊に聖武天皇の如きは至尊の御身を以て剃髮して、三寶の奴と稱し給うたほどで、光明皇后と共に厚く佛教に歸依し給うたのであつた。而して國毎に丈六の佛像及び菩薩像を作り、佛經を寫さしめ、七重の塔を建てしめ給うたが次いで天平十三年（紀元一四〇一）諸國に僧尼の寺院を建てしめ給うた。これが所謂國分寺である。また朝廷の祈願所として天下泰平を祈らなため大和に東大寺を建立して之を總國分寺となし給ひ、彼の五丈三尺の大佛を造らしめ給うたことは人のよく知つてゐる所である。

かゝる時代に於てわが建築は前期の繼續であつたが、一般人文の發展と共に長足の進歩をなし、圓滿なる成果を擧げたのであつた。

### (イ) 宮殿及住宅

この時代の宮殿はどうであつたか。これも元明天皇の遷都（平城京遷都は和銅三年、紀元一三七〇）に方りて大内裏の制を布き一大發展をなし得べき機運に向つたが、それが果して完備したであらうかといふことは疑問である。

けれど、當時の宮殿が一般の風潮と共に唐の模倣であつて、丹楹碧甍の大陸風の大建築があつたことは疑ふべき餘地なく、聖武天皇が即位し給うた神龜元年（紀元一三八四）五位以上及び庶民の富有なるものをして家屋を丹堊で塗らせ、屋根を瓦で葺かすやうに命じ給うたのであつた。

これでもこの頃は日常の生活が大陸の模倣となり、衣服なども支那の風を眞似たのであるから従て住宅も餘程影響を受けて支那風になつたことが自然の數であらうと思ふ。

(口) 佛 寺

佛寺は非常に大陸風になつて、規模は愈々壮大となり、其の手法も前期に比して一進歩を認めることが出来る。

組物の如きは完全なる三手先の構架法を生ずるに至つた。さうして推古天皇の御代以來出來た我が寺院建築はこゝに奈良六宗の伽藍建築を大成し、同時に所謂奈良朝建築を大成したのは驚くべき發達と云はねばなるまい。彼の奈良の大佛殿の如きは空前の大建築として殊に忘れてはならぬ。

(ハ) 神 社

既戸皇子の頃より既に萌芽してゐた神佛同體の説は愈々勢力を得たけれども未だ神社には佛寺の形式を加味しない。彼の藤原百川が制定した造殿儀式を見

ても社殿は神明造を標準としてゐる。されば未だ曲線形を加へざりしことは明かであらう。

遺 物

唐招提寺金堂 (大和國生駒郡都跡村所在)

唐招提寺は天平寶字三年(紀元一四一八)の創建で、開山は唐僧鑑真、律宗の本山である。

堂は七間四面(桁行九十二尺、梁間四十八尺)石壇の上に立てる單層の建物で、屋蓋は寄棟で、屋上に鴟尾しびを上げてある。

すべて唐風の莊重なもので、柱は雄大で、堂の前面を一間だけズツと通して開けてあるのは注意すべく、組物は三手先の完備したものである。

内部は石で佛壇を築き、天井は組入で支輪間に極彩色を施してある(外部に

もある)、この堂の細部は完美の域に達してゐると云はれるほどあつて、實によく出来てゐる。佛壇の後壁には佛畫を描き、柱、長押、等にも彩畫を施してあつたが今はスツカリ剝落してゐる。外部は主として丹土で塗つてある。

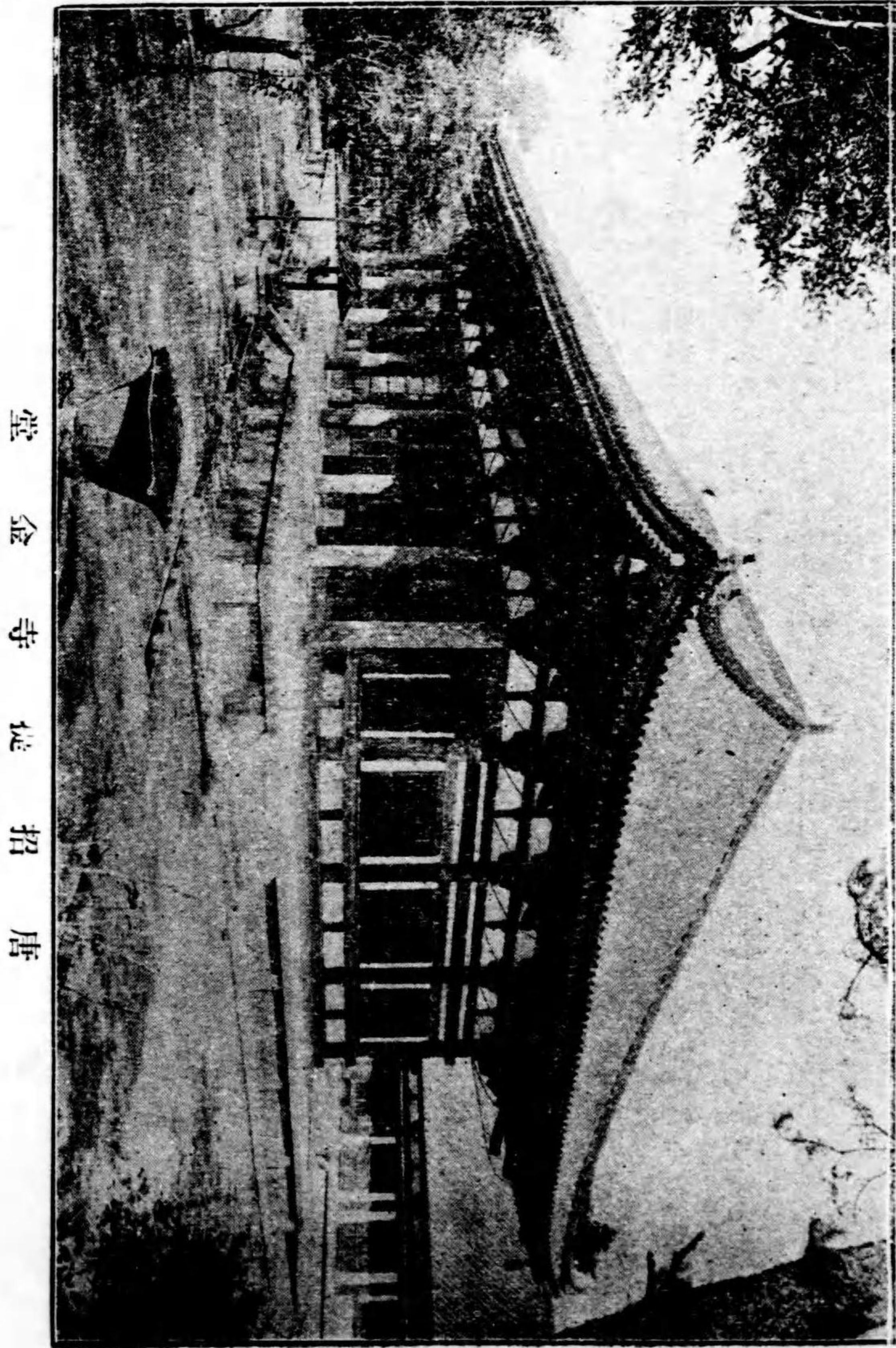
この他此時代の遺物としては、當麻寺東塔、東大寺法華堂、法隆寺夢殿、法隆寺傳法堂、新薬師寺本堂、東大寺轉害門、東大寺法華堂經藏等いづれも奈良縣下にある。

【備考】

寄棟造 四注ともいふ、入母屋造の如くして、妻を切らず、前後左右に同様の屋蓋を葺き下せるもの、

鴟尾しび 屋上の飾りで棟の兩端に上げる。

支輪しりん 軒の組物の内方にある圓曲せる小天井



(47)

堂金寺延招唐

## 第四章 平安時代

平安時代とは桓武天皇の平安遷都から鎌倉幕府の出来た文治の頃（文治元年は紀元一八四五）までを指していふのであるが、前期と後期とは自ら差異がある。これを弘仁期と藤原期とに分ちて説くことにする。之は専門家の方でもさういふことにしてゐるのである。

### 第一 弘仁期

前期に於て受けた唐の影響は、此の期に於て漸く成熟しはじめ、藤原期に至つてそれ等の文明が日本化したのであるが、この時代に於ても、既にその傾向が窺はれるやうである。まづ桓武天皇は政略上、平安遷都を斷行し給うた。歴史上遷都といふことについてはいろいろの原因が認められるが、同じ都に永く

住むと自然に因襲的ないろ／＼の弊害が出来て来る。さうした時に遷都をやつて因襲より免れるといふこともその原因の一つとなつてゐることがある。桓武天皇の遷都も矢張りさういふ原因があつたことは疑ふ可らざることであつたらしい。

さてこの頃は前代に金に飽かせて唐の模倣をやつたので大分國力も衰へて來た。而して平城京の規模は大きいのみでなか／＼整理することが出来なかつたらしい。尤も平安京に遷られた前に長岡京も計畫されたが遷都獻策者が横死したので中止となつたのである。

さてこの頃は前代ほど支那文化直輸入のことはなく輸入されたものも餘程日本趣味といふものが考へられてゐたやうである。

佛教の如きも彼の華嚴、法宗、三論の如きは日本人には六ヶしすぎたのでその信仰も固有の敬神といふことを棄ててまでやる勇氣はなかつた。であるから

自然に佛教を信仰する心も薄くなつて行つたのであるが、こゝに空海と最澄といふ二人の偉い僧が出て、南都の舊佛教を壓倒して大に我國人の信仰を得たのである。即ち最澄は天台宗を、空海は眞言宗を傳へたのである。殊に空海の唱へはじめた本地垂迹説ほんちすゐじやくせつは當時の敬神的精神を巧みに利用したもので、藝術史上にも亦忘る可らざることである。

これ等の結果當期の佛寺建築は都市を離れて深山を擇んだからして、前代の伽藍のやうに左右均齊といふやうなことは破られるやうになつた。これは注目すべきことである。また一般の建築に亘つて見れば細部の手法は前代と大差ないが、雄渾の氣を減じてゐると云はれるのは、日本化しつゝあつたのであるから寧ろ當然のことであらう。

### (イ) 宮殿及住宅

平安京は大體に於て奈良京と似てゐるが餘程壯大なる計畫の下になつたのである。まづ北は一條より南は二條に至り、東は東大宮より西は西大宮に至る南北四百六十丈、東西三百八十四丈の地を瓦垣を以て繞らし、その外には溝を作つてある。而して四方に十二門を開き、内に官省寮司を始め大極殿、豐樂殿、中和院、武德殿等があり、天皇の御住居は其中央より稍東北に位し内外二重の廓があり、而して内廓に承明門があつて之から複廊になつて廻つてゐる。その中には中央に紫宸殿がある、之が内裡ないりの正殿である、その後仁壽殿と承香殿の二殿があつて仁壽殿は昔は常の御殿で、承香殿は附屬建築であつたといふ。その外清凉殿、後涼殿、綾綺殿、溫明殿、安福殿、校書殿、以下の數多の殿舎がある。(今日の京都の平安神宮によつて當時の大極殿の梯は略推察されるであらう)

而して平安京の皇居も度々焼けてその都度新造されたのであるが概ね舊に倣



つて造營されたのである。それ故、後世のものによつて桓武天皇の時のものもある程度まで想像することは出来やうと思ふ。而して之等の建築様式は前代の繼承であつたであつた。

(口) 佛 寺

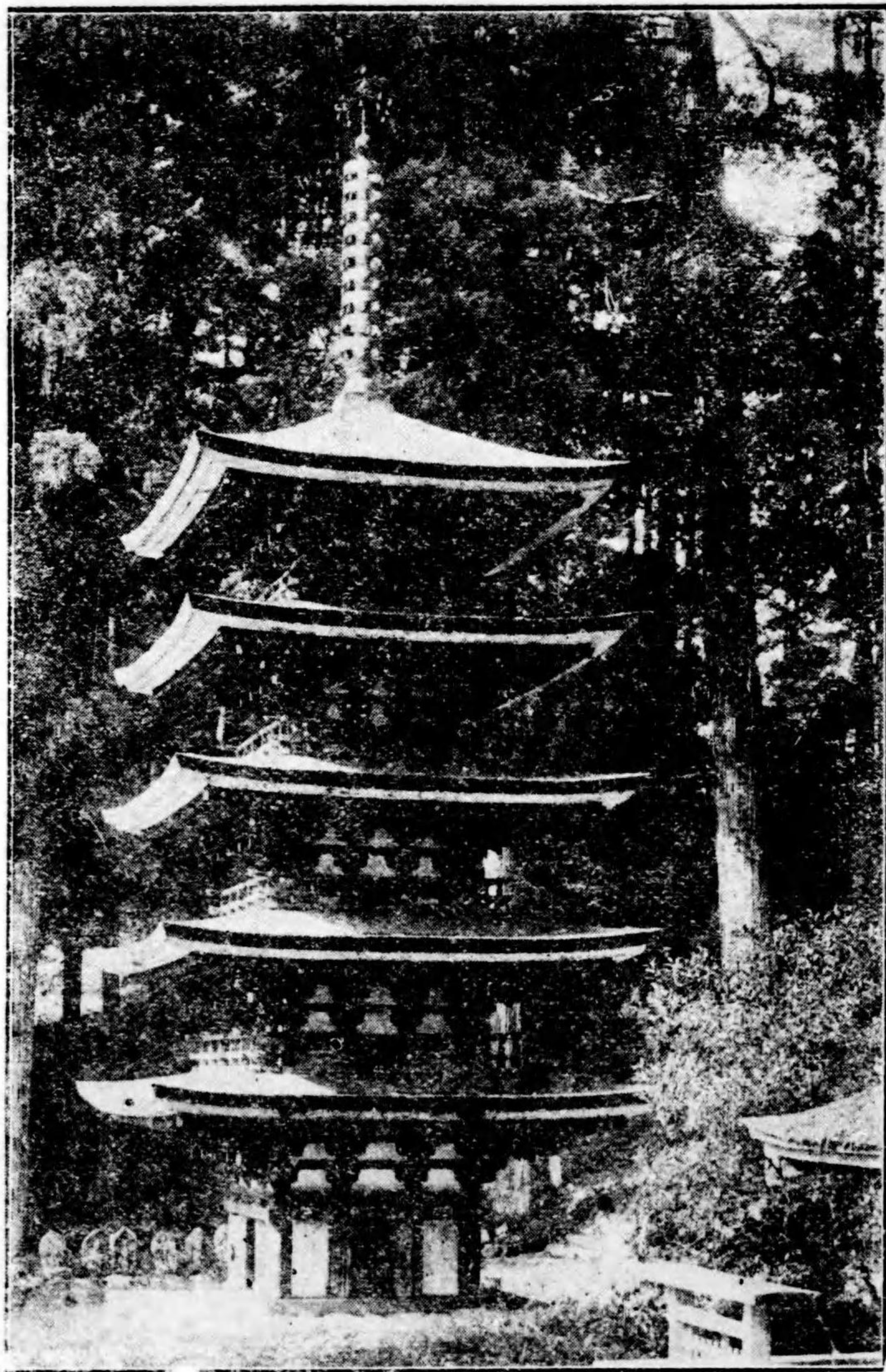
佛寺は天台眞言の兩宗の時代であるからして建築も以前のやうに都市の近くに左右均齊の堂々たる伽藍を造ることは行はれず、深山に造られるやうになつた。その必然の結果として不規則なる地形の上に配列もいろくの不規則な變化をしてゐるのは注意せねばなるまい。而して、床は板張りとなつて石敷、瓦敷は行はれなかつた。また多寶塔の新建築を生じたのもこの頃である。

(ハ) 神 社

この期に於て神社にはじめて曲線形が加味されて來た。而して春日造かすがづくりと流れ造なれづくりの新様式が現出したのである。

春日造かすがづくりは大鳥造、又は住吉造のかまひ前に向拜をつけ、本殿とこの向拜の屋蓋とが連結して、その全體が曲線の反そりを有つやうになつたもので、千木ちぎは置千木おきちぎ、(裝飾的のもの)である。また流れ造なれづくりは神明造の屋蓋とその向拜の屋蓋とが連結して一つになり、同じく反そりを有つやうになつた。つまり神明造の前面の屋蓋が延長して反そりを有つたものであるとも云ひ得る。

この外二つの神明造を接続した八幡造はつまつづくりなる様式も出來たし、又聖帝造せうていづくりなる一種變つた様式も出來た。その實例は近江の日吉神社である。而して今日見る如き各種の鳥居とりゐは大抵この時代に出來たものと思つて差支ない。



室 生 寺 五 重 塔

( 5 5 )

遺 物

室生寺五重塔

(大和國宇陀郡室生村所在)

この塔は弘法大師が天長九年(紀元一四九二)室生寺を再興した時、一夜に建てたといふ傳説がある。この傳説は逆も信ずる事は出来ぬが、この時代の建造にかゝるものであることは専門家も構造の上から疑はないのである。

而して三間(方八尺二寸、高五十三尺四寸)檜皮葺の小型のものであるがこの期の建造物を代表すべき好個の遺物である。

柱は垂木なども天平期の傾向を残してゐる。而して權衡は少しく高過ぎると云はれてゐるが、木割\*きわりの小なること、屋蓋が檜皮\*ひのかわで、勾配緩く、軒と勾欄\*かかんの出が多いことはその缺點を充分埋め合せてゐるやうである。

九輪は我國に於ては唯一の特例で、水煙\*みづけりの代りに寶蓋\*ほうがいがあり、その下に舍利

( 5 4 )

を納むる寶瓶形がある。而して輪には風摺が附いてゐる。

この外、室生寺の金堂は五重塔より少しく後れて出來たものらしい。

【備考】

木割 用材の大きをいふ。

寶蓋 傘形のものである。(寫眞にて寶生寺五重塔九輪の頂上を見よ)

## 第二 藤原期

平安朝時代は前時代に吸収せる大陸文化の日本化時代であつたとは云ふが、それが明かになつたのは宇多天皇の御宇に菅原道眞が獻策して遣唐使を廢してから以後のことである。

かくして一度外國と公式の交渉を絶つた我國の藝術は時代の思潮と伴つてだん／＼日本化して行かねばならぬ運命を有つて來たのである。殊に道眞が貶せ

られてから藤原氏專横の世の中となり、所謂藤原時代なる華美婉麗なる時代を現出したことは今更云ふまでもなく誰も知つてゐることであるが、美術工藝の發達は驚くべきものがあつた。

かうした時代に於けるわが建築はどんなものであつたか。これ亦大陸の模倣より漸次日本化に傾いて行つたのは寧ろ當然のことであらう。

さて此時代の建築の特徴は甚麼どんなものであつたかと云ふに。一般の藝術と同じく日本民族固有の趣味を加へられたがためにだん／＼と時の經るに従つて優柔なものとなつて、纖弱とも云ひ得るやうになつたのである。

### (イ) 宮殿及住宅

この頃の宮殿には寢殿造しんでんづくりといふのがある。これはもとは支那のものから脱化したのであるが、長方形の極めて簡単な平面圖を有つてゐる屋が廊でもつて連

結されてゐるものであつて、その形式は一定してゐる。まづ母屋は南面して建てられ、東西北の對屋はその東西北方に整然と建てられすべて廊を以て結びつけられてゐる。屋蓋はすべて入母屋である、庭園なども従てある形式を備へるやうになつて、南方に池を中心としたものが出来るやうになつた。彼の釣殿などの稱あるのも全く池につき出した附屬屋のことに過ぎない。山城國宇治郡醍醐の三寶院、京都の清水寺の如きはこの形式の餘影を少しく存してゐる。

### (口) 寺院

すべての建築物と共に寺院も此の期に至つて大に日本化され、床は前期と同じく板であるが坐ること適せしめ、全體の規模も手頃のものになつたけれど、莊嚴といふことを主としてゐた。矢張り天台眞言兩宗の伽藍全盛時代である。概して瀟洒なものとなり、屋蓋の勾配が緩くなつて、穩かな落着ついたものと

なつて、如何にも日本人固有の趣味に適應するものとなつた。

この時代の寺院建築としては名だけ傳はつてゐる大きなものも少くないが、今日残つてゐるものでは宇治の鳳凰堂や平泉の中尊寺金色堂などで、建築の外、部よりは内部を美事に裝飾するやうになつた、これは宗教上の關係から來たのである。

### (ハ) 神社

神社は前時代の繼續でたゞ細部に佛寺建築のそれが應用されてゐる位で遺物としては宇治の宇治上神社がその好例として擧げられてゐる。

而してこの期の後期に至りては大分寺院の感化を受けて鳥居玉垣等が樓門や廻廊となつたり、また本殿も今迄の簡單なるものから一進歩をなして入母屋造のものも出来るやうになつた。畢竟神佛混淆となつたので、中には佛寺の中に

神社を有するやうになつて來たのは時代の思潮とよく一致してゐる。従つて神社が佛寺建築に接近して來たことは自然の數であらねばならぬ。

遺物

鳳凰堂 (山城國久世郡宇治町所在)

平等院は元藤原賴通の別莊であつたのを永承七年(紀元一七〇六)棄て、寺としたので、その中に阿彌陀堂を建てたのが天喜元年(紀元一七一三)である。而して之が即ち鳳凰堂である。

この堂を鳳凰堂といふのはその平面が鳳凰の飛んでゐるやうになつてゐるか  
らだといふ。即ち中央に中殿(裳階桁行四十七尺、梁間三十九尺一寸、中堂桁  
行三十四尺、梁間二十六尺一寸)があり、左右に翼廊が前方へ折れ曲つて居り、  
左右翼廊、桁行折廻り六十三尺四寸八分、梁間十三尺)その折れ曲る角に各

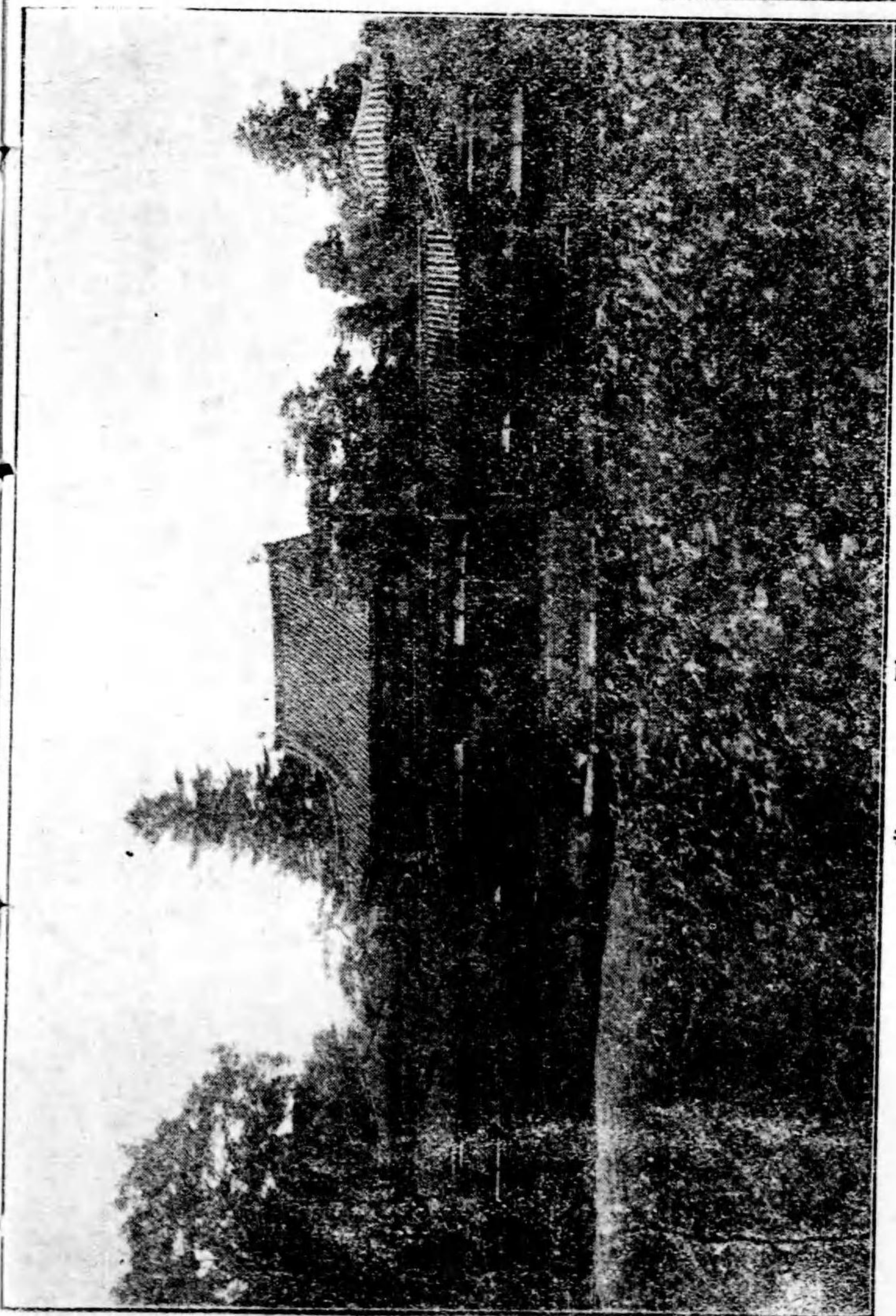
一つの樓（方十尺三寸、高三十六尺四寸）があつて左右の均衡を保つてゐる。而して本殿の後方に長く尾廊（桁行五十二尺六寸、梁間十四尺）がある。

平面は大體右のやうであるが立面はまた意匠が自由でこの期の藝術傾向を遺憾なく表はしてゐる。まづ中殿は重層で一段高き石壇の上に巍然として立ち、如何にも中心であることを示してゐる。屋蓋は上層は入母屋いりもやであつて棟上左右兩端には銅製の鳳凰が上げてある。而して下層の屋蓋は故らことほに中央部を一段高くして單調を破つてゐる。（このやり方は山城國宇治郡醍醐村なる法界寺阿彌陀堂などに於ても見る所である。）

左右の樓は寶形造ほうけいづくりであつて、翼樓の前に向てゐる端は切妻きりまとなつてゐる。而して中殿の上層、樓、翼には勾欄を廻らしてあつて、それが如何にも輕いのはよい。かく自由な構造を試みて優秀な立面を得たことは當時の建築家が凡手でなかつたことを示し、同時に苦心した所であらうと思はれる。



鳳 凰 堂



柱、長押、垂木等の木割は余程繊麗になつて純日本趣味を發揮し、同時にこの時代をよく表はしてゐる。

外部は丹土を塗つただけであるが内部は至る所に裝飾を施し、内陣の柱、斗拱、天井等は全部寶相花を美しき彩筆で描いてあり、扉、壁等にも托磨爲成の筆と傳ふる佛畫があり、天井下の壁間には天人の彫刻がある。その他藤原氏盛期の佛は至る所に窺はれ、螺鈿らでんなども用ゐられてゐる。唯大分荒れてゐるのは遺憾であるが、それでもこの時代の代表的の好標本とせざるを得ない。恐らく美術的の木造建築としては世界一とも云ひ得るであらう。

この外にこの時代の遺物としては法界寺阿彌陀堂、陸前平泉の中尊寺金色堂、同經藏、山城大原の三千院、奈良の興福寺三重塔、常陸白水の阿彌陀堂等がある。

【備考】

切妻造 隅棟すみむねのなき屋蓋にして、軒と棟との長さは等し。  
入母屋造 屋蓋の妻の上部を垂直に切りたる形。

## 第五章 鎌倉時代

平氏の滅亡後、頼朝の鎌倉開府から南北朝時代までを指していふのであつて、一般の思想の上に大變化があつたと同じく、建築術の上にも非常な變化があつて、平安末期に於て華麗纖弱に流れたるものが禪宗建築によつて破られたのであつた。

それは即ち宋の影響が明かに認められたことで、飛鳥時代や奈良時代に隋唐の影響を受けてから漸々と發達變遷して來たわが國の建築は一時外國との交渉を絶つてゐたがこの時に至つてまたもや宋の影響を受けたのであつた。

佛教にしてはこの時代に禪宗が這入つて來た。而してわが建築の上に於ても

禪宗寺院の新様式が這入つて來たから、禪宗寺院でないものにまでも、その影響を及ぼすやうになつたことは止むを得ぬ次第である。

元來宋の建築は同じく漢人種である唐の系統に屬してゐるものであるからして、この度宋の影響を受けたわが國のこの時代の建築はまもや奈良朝時代の復興とも云ひ得べく、雄壯なる思想に伴へるものが出來たのは興味あることで、殊に彫刻などは大に注目すべきであると云はれてゐる。

この時代の宋の影響を受けたことは前にも述べたが、なほ忘るべからざることは、この時代に和様わやう、唐様からやう、天竺様てんじくやうの三つの様式があつたことで、後にはこれ等の各様式が混合して觀心寺様くわんしんじやうなる一變形式を造り出した。

和様わやうとは在來發達して來たものであることは云はないでも分つてゐるが、唐様とは主に禪宗建築の様式で肘木や柱などに特徴があり、天竺様とは僧重源が大佛殿再建の時に用ゐた様式であつて支那南方廣東地方の様式であると云はれ

差肘木が用ゐられてゐる。

かくして鎌倉時代は建築史の上に驚くべき大變遷を來した時で、それが支那大陸との交渉に原因したことは忘る可らざることであるが、兎に角設計、構造が頗る自由になつて、彼の海老虹梁なども出來たのである。

(イ) 宮殿及住宅

寢殿造はこの期に於ても繼續せられたが、その外、武家造なる新らしきものが武家の必要に應じて鎌倉に出來はじめた、これはいろ／＼の點に於て在來の寢殿造と異つてゐるが、瓦は少しも用ゐず屋は茅又は板を以て葺き、門も、扉も、上に土を上げたものである。而して平面圖も違つてゐるが。戸や障子等も余程近代的の傾向を帯びて實用向きとなつた。明障子等はその著しいものである。要するに華美な意匠を避けて専ら實用に適するやうに造られたものであるらしい。

るらしい。

(ロ) 佛 寺

この期には佛教の種々の宗派が澤山出來た時代である。

けれど前に述べたやうに、この期の建築物、殊に佛寺建築には宋の影響が多く現はれてゐて、床を瓦敷として柱や肘木に特徴を有つた禪宗建築式なる唐様來り、又差肘木※ぎしほぢきを用ゐたる天竺様來りてんぢやうやう、またそれと同時に前期の繼承である和様わやうがあつたのである。而して唐様は禪宗建築、和様は眞言、天台の建築として用ゐられ、天竺様は一定した宗教色を有つてゐなかつたやうである。けれどもこれ等の三様式は後に至つて互に相混じて觀心寺様くわんしんじやうなる一様式を生ずるに至つたのである。

天竺様の標本には奈良の大佛殿の鐘樓や南大門があり、唐様のものでは鎌倉

圓覺寺の舍利殿がある、而して有名なる遺物には和様に京都の三十三間堂があり觀心寺様に河内國南河内郡川上村なる觀心寺の本堂がある。

(八)

この時代に於ては神社に益々佛寺建築の手法が入り込みて往々佛寺の山門のやうなものが神社建築に應用されて來たのである。

遺物

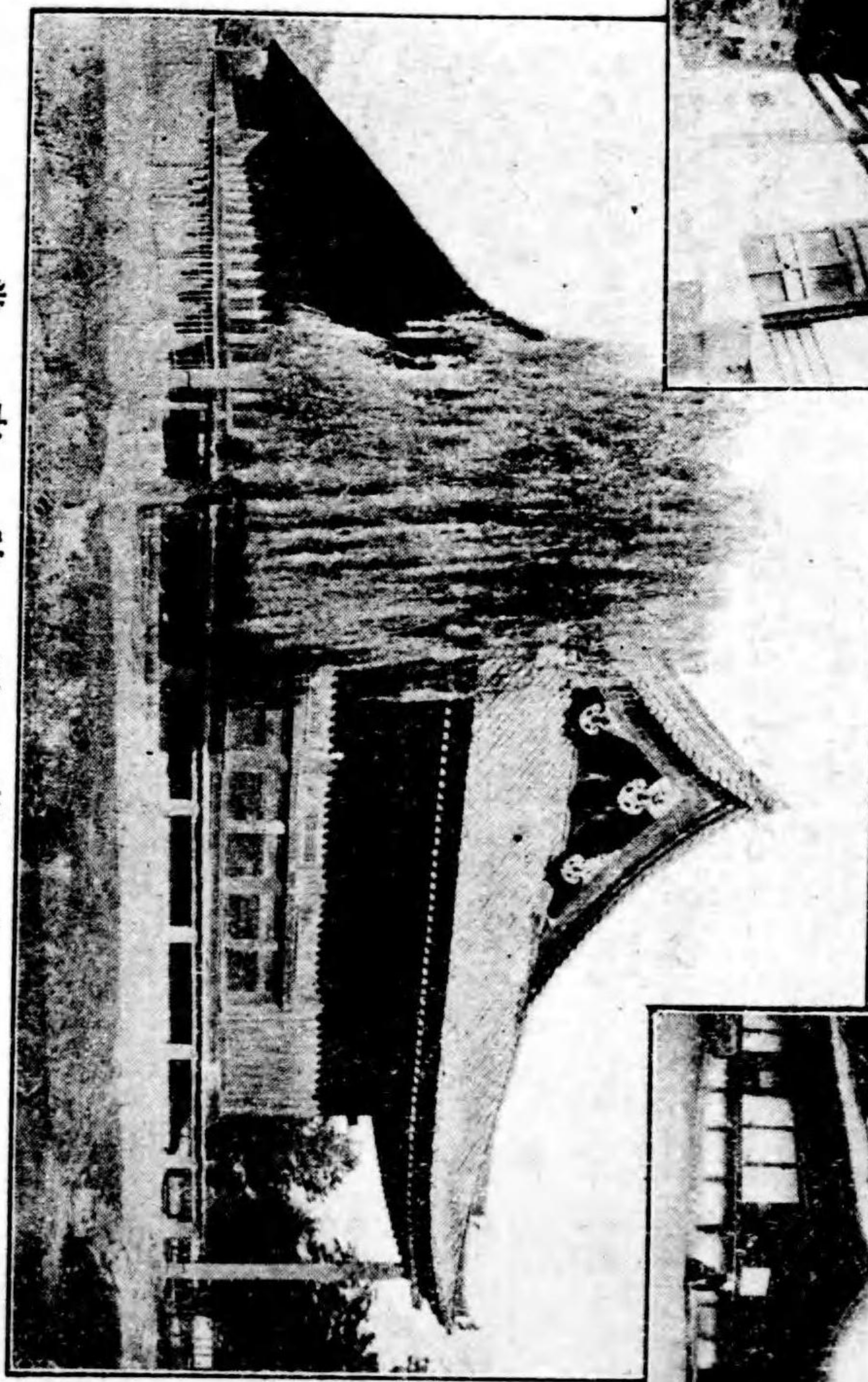
蓮華王院本堂 (山城國京都市所在)

これは俗に云ふ三十三間堂で和様の標本としてこゝに説明しやうと思ふのである。

今日のもは文永三年(紀元一九二六)の再建て平面は三十五間五面(桁行



觀心寺本堂 (右)  
同上 (左)



蓮華王院本堂

三百八十九尺、梁間五十四尺）といふ細長い大建築である。屋蓋は入母屋造で、横から見ると格構がいゝが、正面から見ると馬鹿氣で長いので、屋根が低く、而も少しも變化のない拙劣なものである。

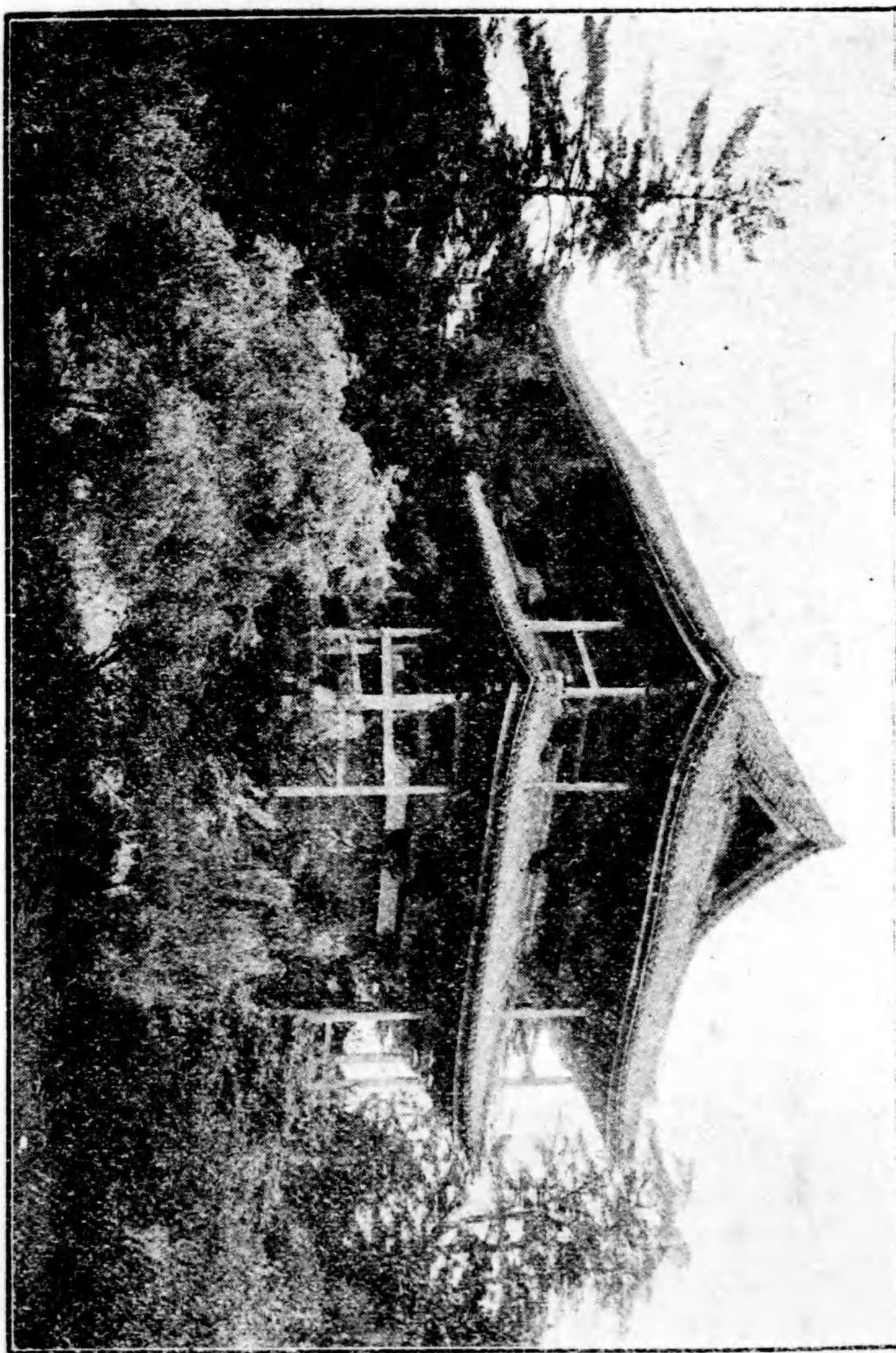
これは鎌倉時代の再建ではあるが様式構造は平安時代のものに倣つたのであらうと云はれてゐる。

東大寺南大門（大和國奈良市所在）

今のものは大佛殿再營の時に再建されたもので正治元年（紀元一八五九）に竣工してゐる。之は僧重源が宋風を輸入して所謂天竺様の構造を用ゐてゐるから、天竺様の標本としてこゝに擧げるのである。

これは五間<sup>\*</sup>三戸（桁行九十五尺四分、梁間三十五尺六寸四分）の樓門で、柱間は最初のものに倣つたのであるが構造に於ては大に今迄のものと違つてゐて

アカギノ



東大寺南大門

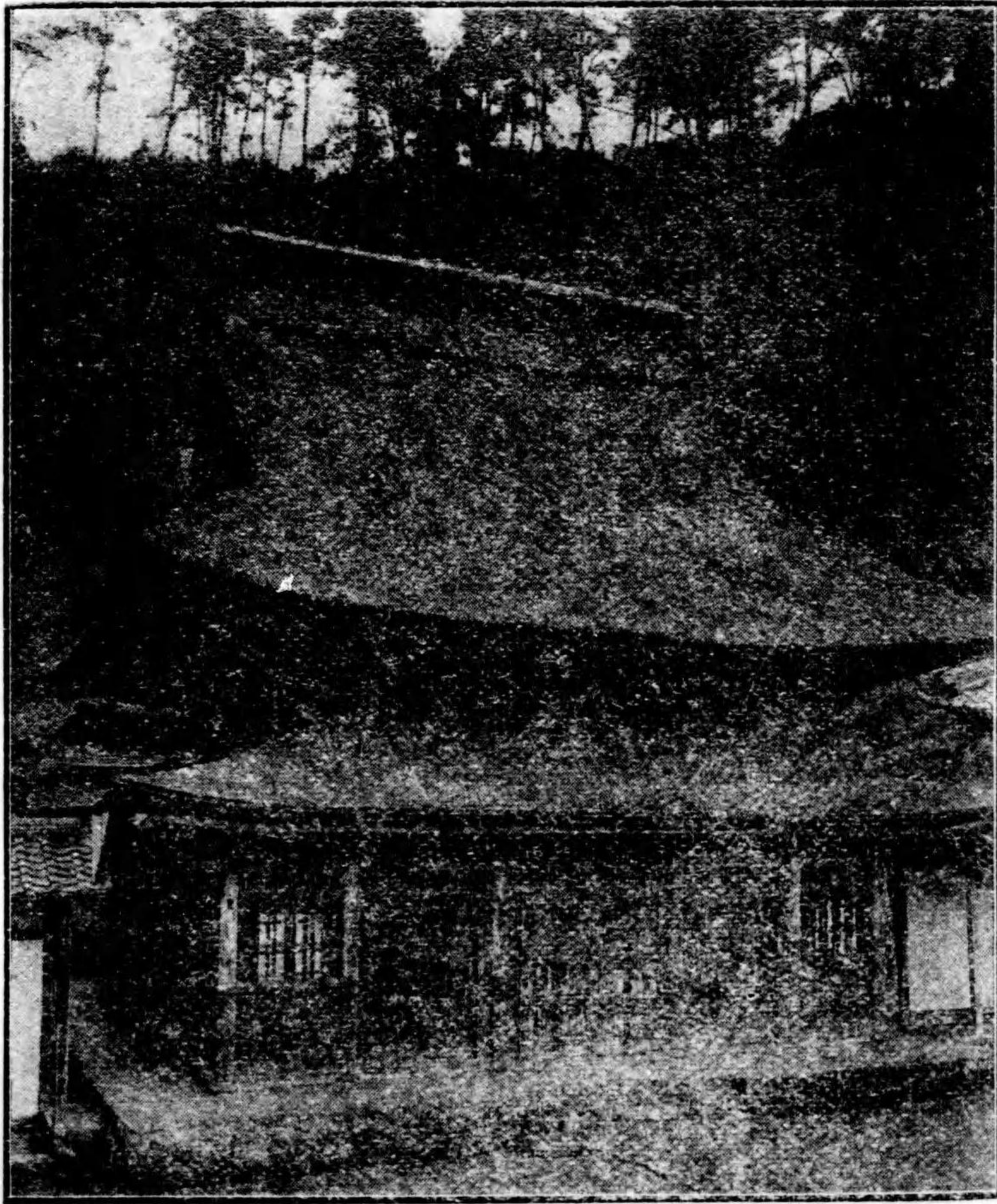
實に自由なやり方を試みてゐる、權衡もよく組物は天竺様の特徵を明らかに示し、※さしひちぎ差肘木が用ゐられてゐる。

圓覺寺舍利殿 (相模國鎌倉郡小坂村所在)

源實朝が宋國能仁寺から佛牙舍利を請ひ受けて之を安置したが、後、北條貞時が圓覺寺に殿を建て、此度に移し納めたといふ。之が今の舍利殿である。ここには唐様の標本として擧げるのである。

建物は方五間(桁行梁間各二十七尺一寸一分)の重層で、上層の屋蓋は茅葺の入母屋造であるが、之は後世に掛けたのであらうといふ想像説もある。兎に角屋蓋が少しく大き過ぎてゐるやうに思はれる。

柱にはちまき粽あり、其の上にだいわ臺輪あり、其他柱の礎石、斗拱等すべての點に於て唐様の特徵を示してゐる。而して上層の軒の垂木は扇垂木※あぶぎたるきとなつてゐる。又そ



圓覺寺舍利殿

の外棧唐戸、華頭窓等を用ゐ、床に瓦を敷きたるは共に禪宗建築の特徴をよく表はしてゐる。

なほ鎌倉時代の遺物としては観心寺様を示す観心寺、近江國石山寺の多寶塔、京都市なる愛宕念佛堂、紀伊國高野山金剛三昧院多寶塔、等が有名である。

【備考】

唐様 禪宗風の建築様式（前述鎌倉圓覺寺舍利殿の説明参照）

和様 従來の建築様式にて眞言、天台兩宗の建築に主に用ゐられしもの（前

述、三十三間堂の説明参照）

天竺様 僧重源が試みし建築様式（前述、東大寺南大門の説明参照）

五間三戸 柱間が五つあつて、中央の三つが開いてゐること。

扇垂木 垂木が扇の如く中心より軒端に向つて放射狀に開いてゐるもの

で、垂木が各個平行してゐないものをいふ。

差肘木 さしひぢぎ

肘木が普通のものとは違つて柱を貫いてゐる。

第六章 室町時代

一 足利幕府の時代であつて、宋の影響が愈々多く藝術の上に現はれてゐる時である。

けれどこの時代の建築の進歩は甚だ心細い次第で、細部の手法に於て僅かに複雑なる意匠の發達した位に止り、次ぎの桃山時代に至るまで左程著しいこともなかつたが、全體に一種の色彩を放ちつゝ變化してゐる。此期に唐様は寺院の建築に於て隆盛を極め、佛寺以外にもこの様式が應用されたもの少くない。而して天竺様は之に反して漸次衰へて行つたのであつた。

また城廓建築、樓閣建築がこの期に於て始まり、同時に實生活に適應すべき住宅建築と茶室建築が出來たことは注目すべきであつて、彼の金閣銀閣の如き



はその例である。

(イ) 宮殿及住宅

住宅のの建築としては武家造と寝殿造とを折衷した書院造しよゐんぞうが出来て、愈々近代的のものとなりかゝり、平面も漸々複雑なものとなつて来た。而して末期に至つて茶室が出来かけて来たことや、城廓建築が新たに起つたことは忘るべからざる特殊のものである。

(ロ) 寺院

佛寺建築は前述の如く前時代の繼承であつて、和様、唐様、觀心寺様等の様式が雜然として存在してゐた時であつた。かくしてこの時代は主に宮殿及住宅の建築が盛んであつたといふべきで、神

社の如きは單に前代の繼承に過ぎないのである。

遺物

鹿苑寺金閣 (山城國葛野郡衣笠村所在)

鹿苑寺が足利三代將軍義滿隱棲の所であつたことは今更いふまでもなく人のよく知つてゐる所である。

所が彼の建てたもので今此所に残つてゐるのはこの金閣だけである。従つて貴重な標本と云はねばならぬ。

この建物は三層の樓閣で、池に臨んで建てられ(桁行三十八尺三寸五分、梁間二十八尺、高四十一尺九寸)第一層は法水院と稱して、右の端に池中に突出した漱清といふ盥漱所がある。第二層は潮音閣と云ひ、最上層は究竟頂と稱して柱、壁、天井、勾欄等すべて漆の上に金箔を押ししてある、これが金閣と云ふ

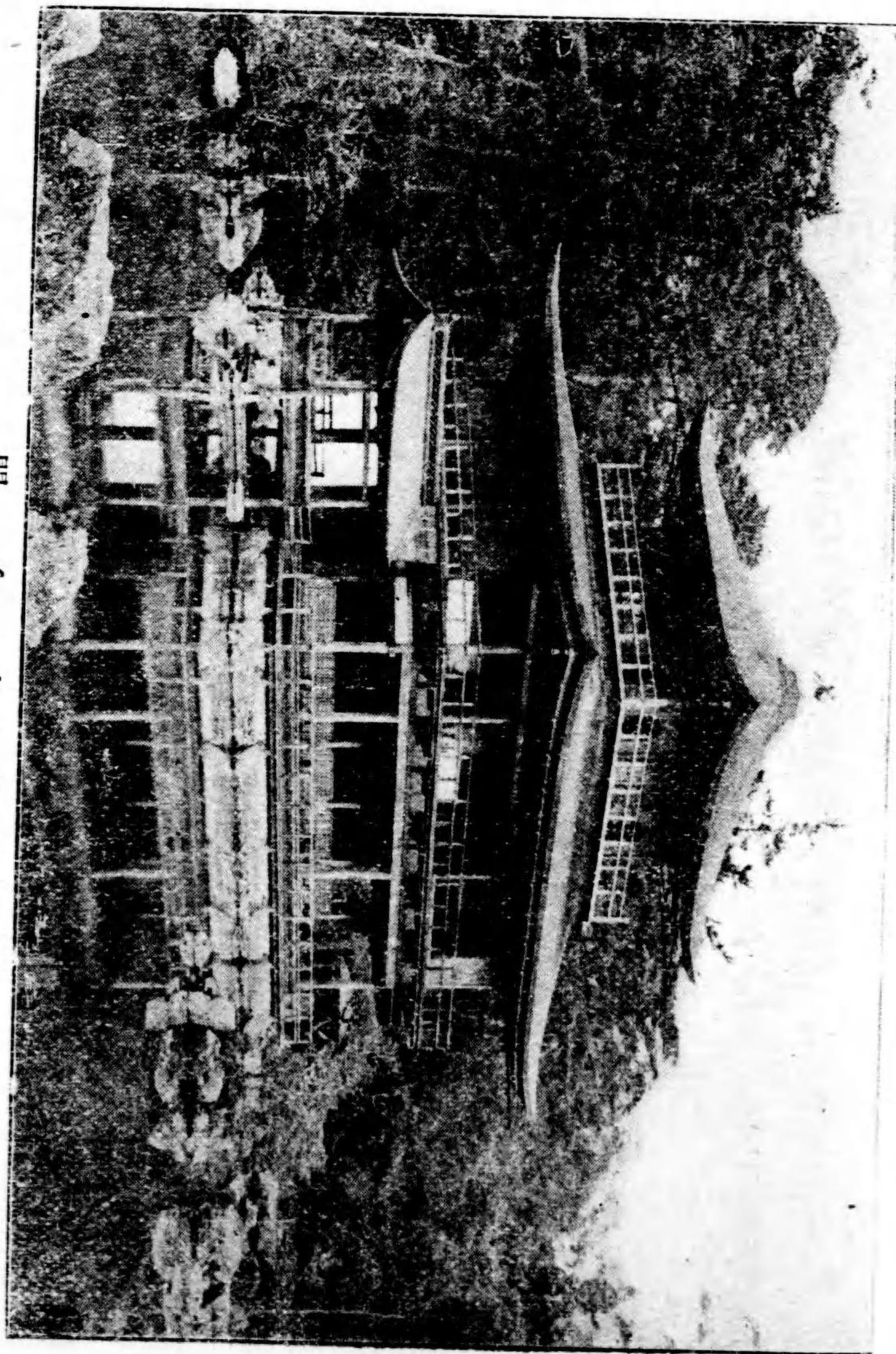
所以である。而て下層や第二層と異り究竟頂はズツと狭く方三間のもので各中の一間だけ唐戸となり、左右の二間は何れも華頭窓を設けてある。それ故三層の單調が巧みに破られてゐるのである。

屋蓋は上中層ともに柿板で葺き、上層は寶形造の上に銅製の鳳凰が上げてある。而して第一層の軒は之を略してあるが、腰組こしぐみの勾欄を附けてある。

下層と中層は同じ廣さであるが最上層のみは狭くなつてゐる。而して屋蓋の勾配が緩であつて、軒の垂木すはらたきが疎垂木となつてゐるので、一見如何にも輕快に見えるのである。

かゝる建築物が池水に臨んでゐるのであるから優美なることは云ふまでもないのである。而して日本の庭園は甚だよく出來てゐる。

この外銀閣、奈良興福寺の五重塔も室町時代のものであるがこゝには略すこととする。



【備考】

腰組 こしぐみ 建物の腰部にある組物で、持ち送りもちおくりとして使用されてゐる。  
 疎垂木 まよしたるき 垂木と垂木の間隔が遠ざかつてゐる。

第七章 桃山時代

これは彼の豊臣秀吉の時代であることは云ふまでもないが、前代の禪趣味の地味なる風の反動として華美を好む時代であつた。

この時は支那は明の時であつて、餘程明の響影を受けたであらうが、要するに今迄の地味なものに満足せず、思ふ存分なことをやつてみるといふ精神は何れの方面にも見えてゐて、建築の上にも明かに一期を劃してゐる。

その注目すべきことは規模の大なることと、佛寺建築を本位とせず、城廓や住宅系統のものが發展したることであつて、桃山城、大阪城、聚樂第などは人の

知る所であらう。

而して建築を華美にするために繪様が大に應用せられて彫刻なども邸宅の建築に盛んに用ゐられ一見佛寺のやうなケバくしい住宅が出来るやうになつた。これは一つは人爲的の變化で秀吉自身の趣味もあつたには違ひなからうが、又同時に彼が天下に威勢を示さんために所謂成金的なりきんてきの豪奢を極めたこともその原因の一でなくてはならぬ。けれど當時の傾向が必ずしも全然それと一致しなかつた譯でもないと思ふ。

殊に建築としては住宅（城廓、茶室等）の發達が目覺ましいものであつて、寺院はそれに次ぐべきであつた。而してまた神社も大分變つたてんげんつくり権現造などが出来るやうになつた。かくして桃山時代は期間は極めて短いけれども、特色を有つた、歴史上看過することの出来ぬ大切な時代である。

(イ) 宮殿及住宅

邸宅建築としては城廓と茶室がある。彼の桃山城、大阪城、聚樂第などは前者に屬すべきものであつて餘程豪放なものであつたやうだ、今日桃山城の遺物などを見ると、如何に當時盛觀を極めたかといふことが想像されるのである。まづ彫刻、繪畫は出来るだけ建築に應用され、目も眩ゆきばかりであるのは前代の室町時代に比して面白い對照をなしてゐる。

様式は今迄の和様唐様を用ゐるに過ぎぬがその規模がすべて大であつて今迄の邸宅とは趣を異にしてゐる。

またこの期の邸宅に附屬した建築で彼の室町時代の金閣銀閣に比すべきものがある。それは彼の飛雲閣である、これは勿論金閣や銀閣から脱化したものではあるが、平面や細部がもつと自由である。今日は西本願寺に移されてあ

る。また住宅と茶室との中間なる茶席建築が出来たのも注意すべく、彼の桂の離宮はその例である。

(ロ) 佛 寺

この時代は伽藍建築は起らなかつたが方廣寺といふ滅法界大きなものが出た。今の京都博物館や豊國神社の邊であるといふことである。

その規模の大なることは驚くべきであつた。所がその後秀頼の時その寺の鐘を再鑄するに際し鐘銘が豊臣氏を惱ましたことは有名なことである。

(ハ) 神 社

神社もこの期に至つて華美な風になつて來る傾向があり、新たに八幡造からごんげんづくり權現造が出来た。これは佛寺の開山堂から暗示を得たものであると専門學者は

云つてゐるが、或はさうであるかも知れぬ。兎にも角にも佛寺と關係深いものであることは事實である。

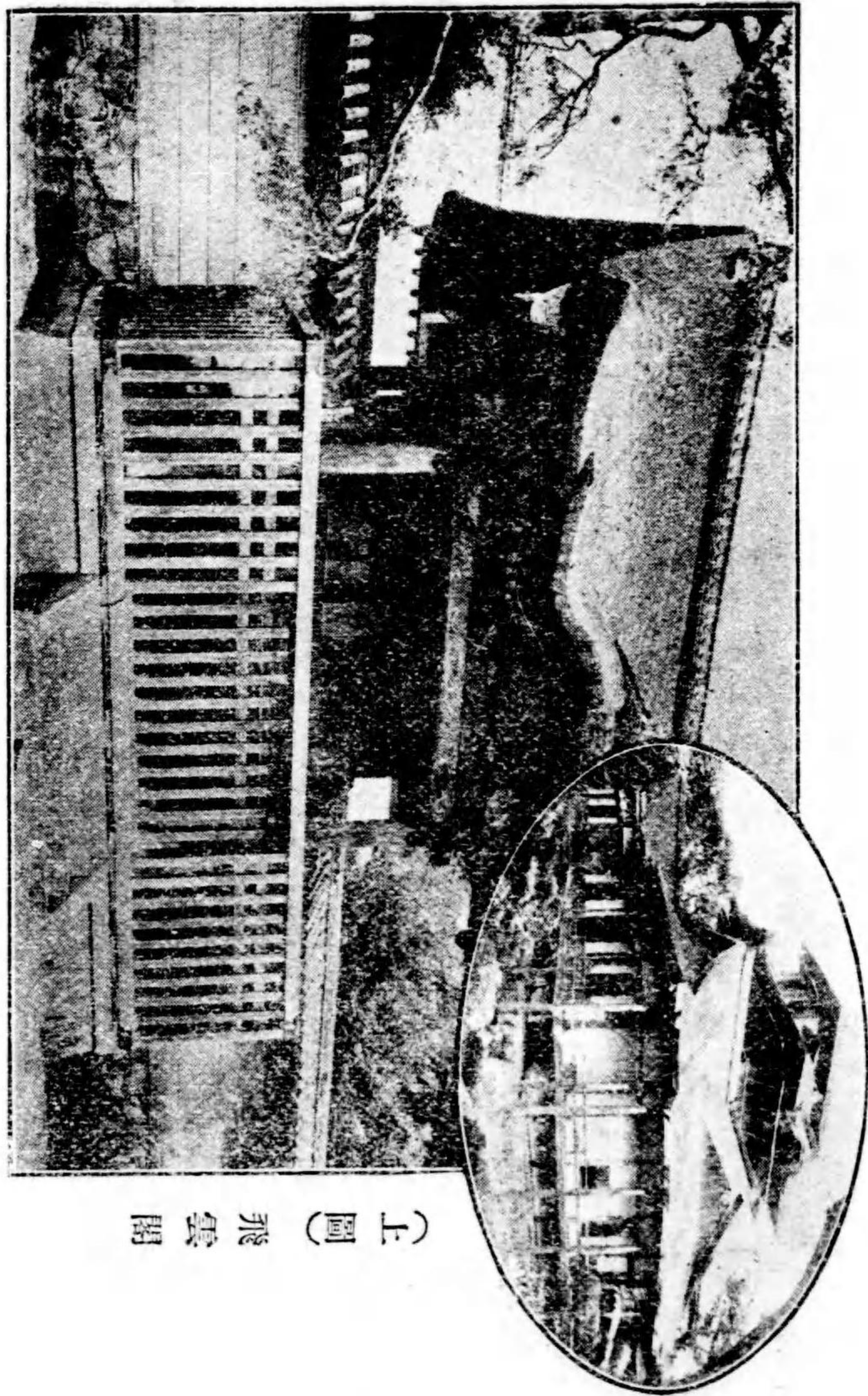
この建築は、次ぎの江戸時代に入つて一層盛んになつたものであるが、本殿と拜殿とを相の間あひまを以て連結してゐるものである。

遺物

大徳寺唐門

(山城國愛宕郡大宮村所在)

これは豊太閤の聚樂第にあつたものを此所に移したのだといふ四脚門(桁行十六尺四寸梁間十二尺二寸)であつて左右は切妻になつてゐる。而して前後には軒唐破風のきからばふを造つて裝飾は所謂桃山式の豪放なる彫刻に華麗なる彩色を施し、金具と相俟て遺憾なくこの時代の傾向を示してゐる傑出した作である。



唐門 (國下)

大徳寺唐門

本願寺飛雲閣 (山城國京都市所在)

これも豊太閤の聚樂第にあつたものを移したのだといふ。三層の樓閣(桁行五十八尺五寸五分、梁間三十八尺五寸五分)で、彼の金閣銀閣などから脱化したものであらう。而して我々の現代の住宅建築の起源とも見らるゝほど甚だよく似た點がある。

上、中、下層の三層とも實に奇抜な構造で、屋蓋も下層の出書院窓しよゐんまどのものは入母屋造としてゐるのに、船入の間の前面を唐破風とせるなど、實にあらゆる對照を大膽に試みてゐる。

三層とも内部には繪畫を以て裝飾としてゐる。又床には疊を敷き、天井は格天井、棹縁天井、張天井はりてんじやうといろ／＼に試みてゐる。

この時代の遺物にはこの外京都教王護國寺(東寺)金堂、西本願寺唐門、豊

國神社唐門、修學院離宮等がある。

【備考】

軒唐破風 唐破風が軒につきたるもの。

出書院窓 書院につきたる窓。

第八章 江戸時代

此の時代の初めは全く桃山時代の繼承である。故に或は桃山時代の一部分として考へ得るとも云はれてゐる。従て藝術史の上では江戸時代とは寛永以後と云ふのが至當であらう。(寛永元年は紀元二二八四)  
けれど時を経るに従て漸く煩雜になつて來て、意匠の嶄新なるものも生じたには違ひないが所謂流派が生じて來て自然卑俗となることも免れなかつたのである。

而してだん／＼と制度の整備といふことがこの建築の上にも影響を及ぼして木割きわりの制なども規則正しく矢筈しくなつて來たのは實に社會一般の傾向とよく一致してゐる。けれど中には奇抜すぎて脱線したやうなものがあり、今までに未だ見たことのない一種の墮落したものもあつた。これは今日なほ存する所の多くの遺物が自ら説明してゐるのである。

この時代の建築は全體の均衡といふことよりも細部に重きをおいたやうな跡があつて彼の桃山式の精神を曲解して誤つた方向に進んだものと云はれても致方ないのである。

且つ木割の制などいふ人爲的の規則が一般社會の諸制度と同じやうな筆法で嚴格に定められたので、建築にも同じやうな形式の弊が出來たのであつた。

而して寺院建築は比較的盛んならず、一般邸宅の建築がだん／＼複雑になつて簡單なる書院造に、茶席の趣味など加はつて漸次發達して來たのは著しいこ

とのやうに思はれるが、その沿革は不明であると云はれてゐる。

(イ) 邸宅

邸宅建築は前に云ふ如く書院造より進んでいろ／＼と複雑になつたやうであるが、この時代に注意すべきはすべての形式の整備と同様に、門とか塀とかいふものに身分によつて一定の式があつてなか／＼面倒なものとなつた、即ち格式過重の結果に外ならぬのである。その外室内の様子もだん／＼實用上變つて來たのである。

(ロ) 佛寺

佛寺として特筆すべきはこの時代に新しく黄蘗宗の傳來と共に入つて來たものでこれは純粹の支那風のものでその例は山城國宇治の黄蘗山滿福寺と長崎の

崇福寺であつて、まづ殆んど支那建築といひ得べきものである。

その外の寺院は概ね前時代の繼續であつて唐様と和様が盛に混合し、その細部が變遷してゐるのみである、その側には關東では東叡山寛永寺、金龍山淺草寺、三縁山増上寺等がある。この外同時代に再建されたものも少くない。

### (ハ) 神社と靈廟

神社と靈廟は最も見るべきものがある、それは技術の巧拙をいふのではなく最もよく當時の時代精神を表はしてゐるのである。

徳川氏の歴代の靈廟は日光と寛永寺、増上寺の三ヶ所に分れてゐるが、中にも下野國日光山なる家康(東照宮)と三代將軍家光(大猷院)の廟及び芝増上寺なる二代將軍秀忠(台徳院)の廟とは立派なもので、それがたとへ政略上であつたと云へ如何に當時の靈廟建築が細部の裝飾に腐心したかゞ分るであらう。

従て Over-decoration (過度の裝飾)といふ誹もある所以である。

これ等の靈廟は彼の權現造を完成したものであつて石の間(相の間である)によりて拜殿と本殿とを連結したもので、屋根は銅で葺き柱、組物すべて彩色を施し、雄壯なる點はないが、細部に於て驚くべき繊細を極めてゐるのは空前のことである。

神社もこの頃は靈廟と甚だ似てゐたこと勿論であるが、前時代の繼續であつて、寧ろ形式に囚はれて來たに過ぎぬといふべきであらう、これは神佛混合といふことと餘程深き關係があるのである。

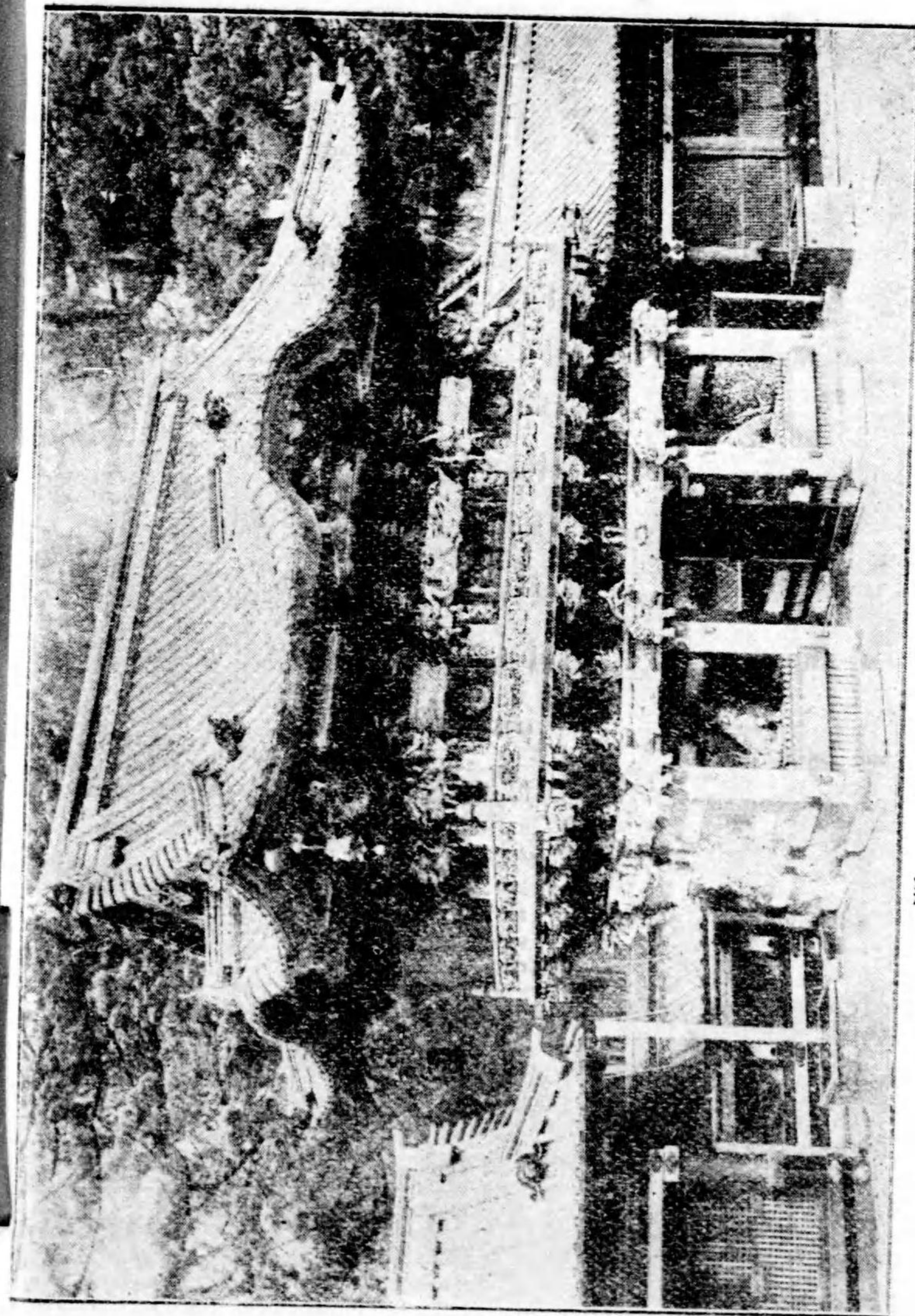
### 遺物

#### 陽明門 (下野國日光町東照宮境内所在)

桃山時代の豪放なるものから一轉して織巧の極致に達したものの代表的の遺



日光陽明門



物である。三間一戸（桁行二十一尺九寸梁間三十二尺五寸）の樓門で、屋蓋は入母屋造であるが四方に軒唐破風を拵らへてゐる。様式は主として唐様を用ゐ、之に多少の和様を混じてゐる。柱、頭貫、斗拱、勾欄、壁間などには精巧なる彫刻を施してある。柱廻りは胡粉塗、斗拱は黒漆塗として、勾欄壁間の彫刻は盛んに彩色を施し又金具を以て飾られてゐる。初層の天井は中央に墨繪の龍を畫き、脇間には天人の圖を彩畫してある。狩野守信、安信の筆であるといふ。兎に角灼爛の美を極めたものである。

東照宮社殿 (下野國下都賀郡日光町所在)

東照宮の社殿は本殿と拜殿と、それからこの兩者を連結する石の間とより成つてゐて、權現造の好標本である。

本殿は方五間（桁行四十二尺梁間三十二尺五寸）で周圍には廻椽があり、屋

蓋は入母屋造で銅瓦を以て葺き上に置千木、葛緒木が上げてある。内部は前方二間だけを外陣とし、後の三間を内陣としてゐるが、更にその中央部の三間二面だけを内々陣としてゐる。

拜殿は本殿の前方にあつて九間四面（桁行六十八尺、梁間二十六尺）で、同じく廻縁がある。而して前に向拜三間を設けてある。屋蓋は同じく入母屋造で正面に千鳥破風、軒唐破風が造られてある。

石の間は本殿と拜殿とを連結する所のもので方三間（桁行六十八尺梁間二十六尺）兩下の屋蓋を持つてゐる。

全體に亘つて裝飾は實に華麗なもので彫刻彩色は至る所に施され、金色燦然たる金具と共に精巧驚くべきものである。

江戸時代の建築物は他にも甚だ多いが江戸初期の代表的ものは日光の諸建築を第一に推さねばなるまい。けれど設計のよいものは京都に多い、智恩院の

如きはその一つである。

【備考】

向拜 建物の正面上り段の上を蔽ふ軒

千鳥破風 三角形の破風

第九章 明治時代の建築

三百年昌平の夢破れて武家政治滅び、王政の復古と共に我國の文物も亦新たになり、従て建築も大に變化したのである。但し日本在來の住宅、神社、佛寺等の建築に於てはなほ江戸時代の木割によつてゐることは忘る可らざる事である。

さて建築が變つて來たと云つてもそれはどんな風に變化して行つたのかといふに、明治維新の後、外國との交通は盛んとなり西洋の文明を頻りに輸入する

と同時に、この建築の様式も西洋風のもものが這入つて來たので、まづ明治三年に龍の口に出來た煉瓦造などはその先驅であつたらうと思はれる。それから五年には銀座の改築が始まり、六年には工學寮が出來てゐる。この頃のものは和洋折衷と云ふべきであらう。

所が十四年の頃には外國人が東京の主要なる建築物を設計して、十四年には九段靖國神社境内の遊就館、十六年には法文科大學が出來てゐる。

その後十九年には造家學會（今日の建築學會の前身）が創立せられた。この頃には漸く日本人の手で設計が完全に出來るやうになつたので、二十一年には工學博士辰野金吾氏の設計にかゝる工科大學が出來てゐる。而して二十五年には帝國ホテル、淺草の凌雲閣（十二階）が出來てゐるが、兎に角この頃は純西洋風の建築が盛んとなつた時代で、様式は主にレネサンスである。

其の後コンクリート、鐵等の新なる建築材料が入つて來て耐震、耐火構造の

建築が生じ、自然と様式も新らしくなつた。様式として新らしきものが入つて來たのは三十年代の後半に佛國からアールヌーボー式が輸入されたのと、その後獨逸からセツション式が輸入されたのが著しいことである。前者は曲線式のもので一時盛んであつたけれど直ちに止んで了つた。これは大建築には向かぬやうである。

後者は分離式と云はれるもので、前者の曲線に反して主に直線の處法である。この式は今日もなほ種々の方面に試みられて將來甚だ有望である。これ等の二式は何れも日本趣味から脱化したものの逆輸入といふ觀がある。

次いで四十年代に至つては日本の建築家が日本の建築の様式について大に研究すべきことに着目し始め、爾來一見混沌たるやうではあるが、一面に於ては着々研究の効果が擧つて行くやうである。而して元來支那系に屬してゐた日本建築が西洋建築の長所と結合してだん／＼と支那系から脱して特殊の一様式を

なして行くことと思ははる。此の間幾多の建築家が努力せしことは僅少ではな  
く、就中早くより學理を實地に應用した辰野工學博士等の功は甚だ大なりと云  
はねばならぬ。彼の日本銀行、中央停車場の如きは實に同博士の設計にかゝり  
しものである。

大略上述の如くして明治より大正にかけてはまだ過渡時代に屬するのである  
が、これから將來は必ず我建築界に一つの様式が出来るであらうと想像される  
のである。

〔訂正〕

四〇頁 六行 二手先組物 軒廻りにある組物が二重のもの。  
同 七行 三手先組物 同上三重のもの。

### 日本建築史要終

大正三年五月廿八日發行

(定價金拾錢)  
(郵税金貳錢)

ア カ キ 叢書  
第九十篇  
日本建築史要

著者 龍居松之助

發行者 赤城正藏

東京市麹町區三番町五〇

印刷者 中田福三郎

東京牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷所 秀英舎第一工場

東京牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

發兌元  
賣捌所

東京市麹町區三番町五〇  
電話番町二二八〇番  
振替口座東京一〇四三二

## 赤城正藏

全國各書林



# アカギ叢書

毎月數篇  
内外刊行

〔定價金拾錢  
郵稅各貳錢〕



- 第一編 歐洲文藝 イブセン 原作 人形の家(ハ名)
- 第二編 哲學叢話 ジエームス 原作 プラグマチズム
- 第三編 歐洲文藝 日野月文學士 著 ダヌンチオの演劇に現はれたる 女性
- 第四編 社會學 葛ルボン 原作 群衆心理(上卷)
- 第五編 歐洲文藝 ドストイエフスキイ 作 痴人
- 第六編 歐洲文藝 村上靜人 著 キウエトデと其著作

- 第七編 哲學叢話 三浦文學士 篇 ベルグソンの哲學
- 第八編 歐洲文藝 オスカアウワイルド 篇 サロメ
- 第九編 哲學叢話 中島文學士 著 オイケンの哲學
- 第十編 博物叢話 寺尾理學士 編 イダンのウの進化論
- 第十一編 日本史談 龍居文學士 著 文化江戸の世態
- 第十二編 歐洲文藝 フライタツハ 原作 喜劇新聞記者
- 第十三編 歐洲文藝 スチゲンソン 原作 壺の鬼
- 第十四編 歐洲文藝 トルストイ 原作 復活

274  
889

○第十五編 歐洲文藝 モーパッサン原作 レデイースマン (一名ベラ、ミリー)

○第十六編 美術叢話 佐々木文學士著 奈良の美術

○第十七編 歐洲文藝 モーパッサン原作 女の一生

○第十八編 歐洲文藝 メーテルリンク原作 モンナ、ヴァンナ

○第十九編 日本史談 龍居文學士著 日本建築史要

○第二十編 社會學叢 葛西又次郎譯 群衆心理(下卷)

特色

- (一) 科學文藝より粹を抜き英を取り紳士の標準智識たるを期す
- (二) 廉價、簡明、平易に解説して天下に讀み難きもの無からしむ
- (三) 名著の紹介は簡にして精髓を失はず

終

